『まアよくお當てになりましたこと。京都の方ですよ。』
『女ばかりで外へも出られず困つてゐらつしやるでせう。斯う云つて御覽。私の名刺を持つて行つて、明日天氣がよかつたら、鮒釣りに出かけますが、若しお暇でしたら御一緒にゐらつしやいませんかツて。』
『かしこまりました。』
仲居は下がつて行つた。又來た。
『どうも有難う御座いますつて。皆さん驚いてゐらつしやいましたよ。まア他見男さんよツて。』
私は何處へ行つても、先づ禮儀として名刺を出して、自分を名乘る所があつた。幸ひにして先方が名を知つてゐてくれゝば幸ひであつた。何故ならば存外そこに諒解が早かつたからだ。
寢るにはまだ時間が惜しかつたので、ブラ〳〵廊下を行つた。帳場を覗いて見たら

主人と先刻の電話女がゐた。
『暇だつたら案内して呉れないか』と、聽くと、横にゐた主人が、『電話は構はないから、行つておいで』と、快よい許しを其の娘に與へた。娘は微笑み勇んで立ち上がりいそ〳〵と表へ案内してくれた。先刻仲居が何かの序でに云ふてゐた所に依ると、其の娘は迎ても大人も及ばぬ悧巧者で、親孝行で、確つかりもので、縹緻よしで、と、口を極めて激賞してゐた。『溫泉のお客樣て仕方のないものですね、あんな小さい娘にも戯かうのですよ。だから夜は大抵のお客樣の座敷へは出さないことにしてゐるんですよ』そんな事も云ふてゐたつけ。
私はツイ其の名を訊いておくことを忘れて了つたけど、主として電話の掛りと聽いたから、でん子さんと假名を用ひよう。でん子さんと私は矢田屋の塀に沿ふて湖邊に出た。そこに森本と云ふ此の溫泉で矢つ張り一流である旅館の前へ來た。
『貴女は毎日通ふんですか。』

『ハイ。』

『朝は何時、歸りは？』そんな平凡な會話の外、用ふるの言葉がなかつた。たゞ田舍にゐる娘さんには珍らしい明晰な發音をする娘で、キビ〳〵してゐたのが、斯うして物を書いてゐながらも思ひ出された。頭のいゝことは小學校が常に一番だつたと聽く前に既に私には解つた。家庭の止むなき事情は、此の縹緻と此の才を生かす道がなかつたんだらう。反對に矢田屋には僥倖だつたんだ。でん子さんも亦矢田屋に見出されたのが幸ひだつたのだ。でなかつたら、家庭の窮餘は亂れ勝ちな溫泉地で、どんな道をたどらせたかも知れなかつたのだ。

寒い風が出て來たので、今度は町の明るさへ來た。電燈がついてゐるばかりで、人の子は殆んど通らなかつた。書店の前に立つて見ると、飾窓許りに雜誌が五六冊と、一寸した本が立て並べられてあつた許り。私はふツと淋しくなりかけて來た。蜜柑の色のいゝのがあつたので、買はうかと思ふたけど、財布がなかつた。

『もつといゝのが旅館に澤山ありますから。』

でん子さんは其麼事を云ふた。

最早寢て了つたのか帳場には主人の姿が見えなかつた。机の下にあつた文藝春秋を一寸拜借して部室に入つた、夜具にもぐつて暫らく頁をめくつてゐたが直ぐ眠くなつたので、電氣を消した。

とろ〳〵とした時に、スーツと極めて小さく入口の襖の開く音がした。私の眼はうつすらと、あいた。

アレーお化けだアー。

平手君が歸つて行く時、今夜お化けが出るかも知れぬよと云つてゐたが、こりや本當に來やはつたぞ。オー恐わ。

加賀の山代をそろしところ、夜の夜中に化けが出る。

山代で出なかつた化けが、片山津で出て來たんだ。いで〳〵物見せ呉れんず。

麗人の湯浴み

明くれば空は雨と變つてゐた。鮒釣りどころの騒ぎぢやなかつた。朝ツぱらから蓄音機を取り出して支那曲「羅浮仙」だの、昨夜かけたのを繰返して、でん子さんや、仲居を相手にしてゐた。そこへ主人が入つて來た。でん子さんは遊んでゐる所を見られたので、若しや叱られやしないだらうかと、ハラ〳〵して其の顏を見てゐた。そして向ふを見てゐるうちに、逃ぐるは今ぞと、韋駄天の如く走つて行つて了つた。主人はにやりと笑つたばかりだつた。

そのにやりのうちには默認が含まれてゐた。その主人も軈ては又立ち上がつて行つて了つた。殘るは仲居と私のみだつた。そこへスーツと靜かに襖をあけて入つて來たものがある。見ると三人の母娘だつた。私はハツとして居住ひを正した。

『昨夜は態々お誘ひ下さいまして有難う御座いました。樂しみにしてゐましたら、この雨ですものねえ。一寸御禮にさんじました。……それからこれが』と、令孃を指しながら、

『どうかしてダンスを習ひたいと申すんですよ。私に賴んでくれツて頻りに云ふものですから、如何かと存じまして、お願ひかた〳〵さんじました。』

品のいゝお母さんが、總代になつて云ふた。中年の奧樣はにこ〳〵して、令孃は又俯向き勝ちで、兩方に控へてゐた。

『えゝ、よう御座いますとも。どうせ斯うして今日は降りだし、遊んでゐるんですから。』

『まア、それではお言葉に甘えまして。さ、久惠さん。』

『ではどうぞ』久惠さんは恥かし相にお手々をついた。

『此の娘は、日本物は少し踊りを覺えましたが、以前から何うかして西洋の舞踏も習

ひたい習ひたいと申してゐましたんですよ。でもねえ京にも色々教へ所ちあります
けど、そんな所には遣りたくはなしと思ふてゐました所。恰度何が幸ひやら。』
此のお母様としては永らくの娘の希望を此の機會に於て滿足させることが何よりも
喜びであつたらしかつた。老いの眼には唯娘の悦びを見ることが何よりの樂しみだつ
たのだ。
私は直ぐ仲居に蓄音機をかけさせた。溶ろかす樣な支那曲はゆるやかに部室の中を
流れ出した。
『お嬢樣、お習ひ遊ばせよ。そりや面白いものですよ』と、仲居は興あり氣に側から
唆かした。
『さ、どうぞ此方へ。』
久惠さんは恥かし相に、又嬉し相にして立上つて來た。私は其の時始めて彼女の貌
をよく見ることが出來た。年齢は廿一か廿二か。げに絶世の美人である。私には京人

形の繪卷物そのまゝを眼のあたりに見る氣がした。何と云ふ美しさであらう。今斯う
した美人に親しく手を取つて教へると云ふことは、生きるものゝ光榮である舞踏を習
つたことの徒爾ならざりしことを思ふた。
見よ、私の左の手は彼女の白魚せる右に觸れた。見よ、私の右手は彼女の腕から脊
へと抱いてゐる。然し其處には何等の衝動もなく、たゞ私には生きたる此の京人形に
私自身の藝術を吹き込むと云ふ喜びのみが、心の中に充たされてあつた。
可成レコードは繰返へされた。私は急所とこつをよく教へたので、そのうち何うや
ら形らしくなつた。そこで一寸汗をふいて、小やすみした。皆は安樂椅子で丸く圍ん
だ。
『まア、お疲れどすやろな。』
『いゝえ、久惠さん如何でした?』と、お嬢樣を見た。
『だん〳〵面白くなつて來ますわ』と、久惠さんの顏は上氣してぽーッと淡くれなる

を呈した。お母様の話に依ると、中年さんは久惠さんの兄さんのお嫁さんで、時々斯うして方々の溫泉を廻つて樂しみまンのやと云ふことであつた。私は『大によろしいナ』と頷いた。『此の嫁は本當に私によくして呉れますに依つて有難う思ふてまンのや』と云ふた。それも大によろしいナと私は合槌を打つた。『何しろ大變だつたつすえ、此の人がお嫁に來たときは、帶だけで六十本や。えらひ騒ぎどすやろ。』

『まアお姑さん、そんなこと云ふもンでありしまへんがナ。』

『云ふたつて、毒にならんさかいなア先生。嫁の威勢のいゝのが、嬉しいんやがナ、もし。』

『さうですとも、さうですとも。えらい結構な嫁はんやナ、よろしいナ。』

『はツは、先生のよろしいは時々變な所へつくよろしいやナ、はツは』と、朝から晴れやかな笑みが部室の中を明るくさせた。

『那谷の紅葉、どうどすやろナ、それを樂しみに來たんやけど。』

『さア、先日私が行つた時、一寸おくれた感がありましたが、今しの此の雨と風では皆麼散つて了つたかも知れませんよ。』

『それぢや困るがナ。』

『よろしゆおまへんか。』

『おまへんナ。今度片山津へ來たのは、それが見たかつたんだツせ。』

『紅葉なら、もつといゝ所がありますよ。』

『へーえ、どこどす?』

其處で私ば山代のくゝらやの庭園のことを詳しく話をした。

『見たいなア、もし。』

『何しろ、一枚の葉に紅、黄、青と云ふのがあるんですからねえ。』

『へーえ?』と、三人は擧つて奇異の感に打たれた。

恰度その時、風は強かつたけど、雨は止んでゐた。私はどうせ此の風では鮒釣りは

駄目だが、一日斯うして籠つてゐるのも賞めたことでもなかつたし、又、先日は少しも落着いてあの紅葉を見ることが出來なかつたりしたので、案内がてらに今一度ゆつくり賞觀をほしいまゝにしてもいゝとフイと思ふたので、

『どうです、若しゐらつしやる樣だつたら、今からお供しませうか。』

『本當ですかいナ。』

『若し左樣なら、うれしおツせ、先生。えらい濟みまへんナ。お氣の毒やナ。』

『よろしゆおうへんか。』

そう云ふと、姉さんが、『よろしゆおす、よろしゆおす』と、笑ひながら喜びの聲をあげた。姉さんも、矢つ張り京美人だつた。脊の高い、ぱつちりした眼の、色の白い、さつぱりとした一見明るい感じを與へる婦人であつた。自分でもくよ〳〵した事の嫌ひな竹を割つた樣な性質だと云ふた。その通りだつた。

久惠さんは何處までも愼み深い娘であつた。靜かに母や姉の會話を聽きとれてゐて

自らは決して進んで物を云はなかつた。けれども今、私がくらやの庭園に案内すると聽いた時に、流石に包み切れぬ喜びを感じたか、『うれしいわねお母樣ッ』と、その白い手で、母の手を握りしめて云ふた。それではと、恰度電車の發車に迫つてゐたので急いでお互は用意にかゝつた。くらやへは矢田屋から豫め通知して貰ふことにして、打ち揃ふて出かけた。

まだ發車しない電車の中に坐り込んでゐると後から後へと來る客は、全で申合はせた樣に此の美人に打たれて了つた。眼の玉を皿の樣に大きくして、唯々打ち見惚れるのであつた。せめてもの賞觀をと、我れも〳〵と、我々の座席の前に競ふた。私はあたゝかい溫泉顏して、つるりと顎を撫でた。動橋乘換へ。

お母樣が側に變つた。

『ねえお母樣』と、すつかり私はお母樣と呼び馴れて了つた。

『お綺麗なお孃樣をお持ちでお樂しみですねえ。どうです、そろ〳〵緣談があります

か、實業家ですか、官吏へですか、學者ですか。』

『この娘は實業家を嫌がつてるんですよ。ですから』と、グツとつばを呑んで、

『今仙臺の大學の助教授に何うかと云ふ話があるんですよ。』

『仙臺？　寒い所ですよ。それに京都から餘り遠いぢやありませんか。一寸娘の顏を見にと云ふ譯には參りませんよ。』

『それで私も考へてまンのや。』

それから私は助教授と云ふと、世間體の人聽きはいゝけど、仲々薄給なものであること。上にゐる教授が停年で罷めないうちは萬年助教授として甘ぜねばならぬこと。そんな事を私は友人のことを引例して話しゝた。お母様は一々なるほどと頷いて、

『私としては何うせ女と云ふものは一度嫁いだら其れッ限りだと思ふので、もう二三年この儘にしておいて娘時代と云ふものを充分樂しませて遣りたいどす。』

『贊成ですナ、して學校は？』

『京都の府立第一な出て、更らに研究科に三年もゐましたのや。京都の府立第一と云ふたら東京のお茶の水どつせ。』

『するとよつほどお出來になる才媛と見えますね？』

『へえ、へえ、根が學問が好きやつてナ、喜んでまン。』

『まア才色兼備の君とでも申しませうか』と、久惠さんをチラと見た。久惠さんは今の會話を耳にしてゐたので、お手々でお口を蔽ふて小さい聲で『助けてー』と、云ふた。私が時々助けてーと云ふたのを、今ぞなんめりと許り應用したんだ。

茲でも嫁の性質善良が姑の口から出た。

『ほんまに、私にようしてくれまツせ。世間にやよく姑と嫁とが仲が惡いもンにしてまツけど、私には不思議でならないがなア、ねえ、もし。』

姉さんが今度は『助けてー』と、云ふた。

山代へ下りると、途中でピタリと平手君に逢ふた。今から君の所へ出かけ樣として

來たんだと云ふ。實は斯う〳〵と話をすると、そりや宜かつた。今日は鮒釣りも駄目だつたからと、時間を定めて打合ふことにして、平手君は會社の方へと踵を廻らして行つた。

くらやへ入つて主人に逢ひたいと云ふたけど生憎留守であつた。過日吉田屋組合長を通じて、重ねて私は庭園を見に來るからと告げてあつたので、改めて申出たのであつた。そんな必要もなく既に矢田屋から通じてあつたので『どうぞお入り』と、仲居が云ふた。私は此の時、仲居がヂロ〳〵と客の頭の先きから爪先きまでを射る樣にして見入る態度が氣に入らなかつた。あとでも思ひ付いたんだが、矢田屋のどの仲居でも廊下で一寸逢つても必ず微笑んで御辭儀をして過ぎたものだつたが、くらやの仲居は自分の受持ち以外の客だと見ると、鼻でも引ツかける樣な顏をして歩いた。その事を後に誰かに話をしたら、くらやは萬事仲居任せなものだから、ツイ左樣云ふことになるんだと云ふた。私はくらやの爲めに惜しむ所があつた。

頭の先きから爪先きまでも見詰められてゐると、まるで此の客は孰れだけ茶代を置いて行くかと計算でもされてゐる樣で不快この上もなかつた。あれだけの名園と、あれ丈けの湯殿と、そしてあれ丈け綺麗な部室を持つてゐながら、ホンの僅かの此のたしなみを忘れてゐる爲めに、どんなに來客の最初の第一印象を不愉快にせしめるか解らなかつた。くらやの主人にして若し此の忠言を納るゝに吝かならなかつたならば、商買は忽ちにして繁盛を來たすことであらう。一人の客を快よく迎へることは、十人の客を引くことである。何故ならば其等の人だちが歸つてからの口から口への廣告は實に偉大なものではないか。

さて話は側道へ外れて相濟みませぬ。私共はいくつかの階段をあがつた。恐らく七ツ位あつたらう。その爲めにお母樣は中途で息を切らして了つた。それをいたわりながら久惠さんは支へる樣にして導いた。親孝行を見てゐる程氣持ちのいゝことはない私まで乘り出して『おツとお危う御座いますよ!!』

漸つと山上まで登つた。ほつとした時に、仲居が『あら鍵を忘れて來た』と云ふ。見す〳〵其處に庭を見ながら、暫らくスツクと待たされて了つた。鍵と云ふのは庭へ出る所の硝子戸のものであつた。私はいきなりパツと其處へ飛び出して如何です？と急に展開を與へる積りだつたのが、見事に裏切られたので、齒切りして口惜しがつた。硝子をすかして見てゐるうちに樂しみにしてゐた好奇心が次第に薄らぎゆく慮かりがあつたからだ。

漸つと開かれた、一同そこにあつた駒下駄を引ツかけて出た。私の眼には先日見た時よりも大分色のあせりと散りゆくもの〻多くを見た。然し依然として美しき眺めは何處までも美しいものであつた。

『まア!!　何と云ふ!!』

『まア!!　何と云ふ!!』

『まア!!　何と云ふ!!』

三人は同時に同じい叫びを上げた。まア何と云ふの外、あまりの秋のうるはしい裝ほひに言葉がなかつたんだつた。私は『まア!!』と、云ふ驚嘆の叫びを幾度きいたか。

殊に母親の如きは眼に涙して喜んだ。『私生れて此麼結構な紅葉を見たことおうへん』と、云ふて一樹毎に近づいて行つては手に取つて繁々と醉ふてゐた。

『先生、うれしゆおまン。先生とお近付きになつたばツかしに此麼い〻紅葉が見られたんどツせ』と、私を拜まむ許りにした。私には又その喜びを見た丈けで、衷心の滿足をした。

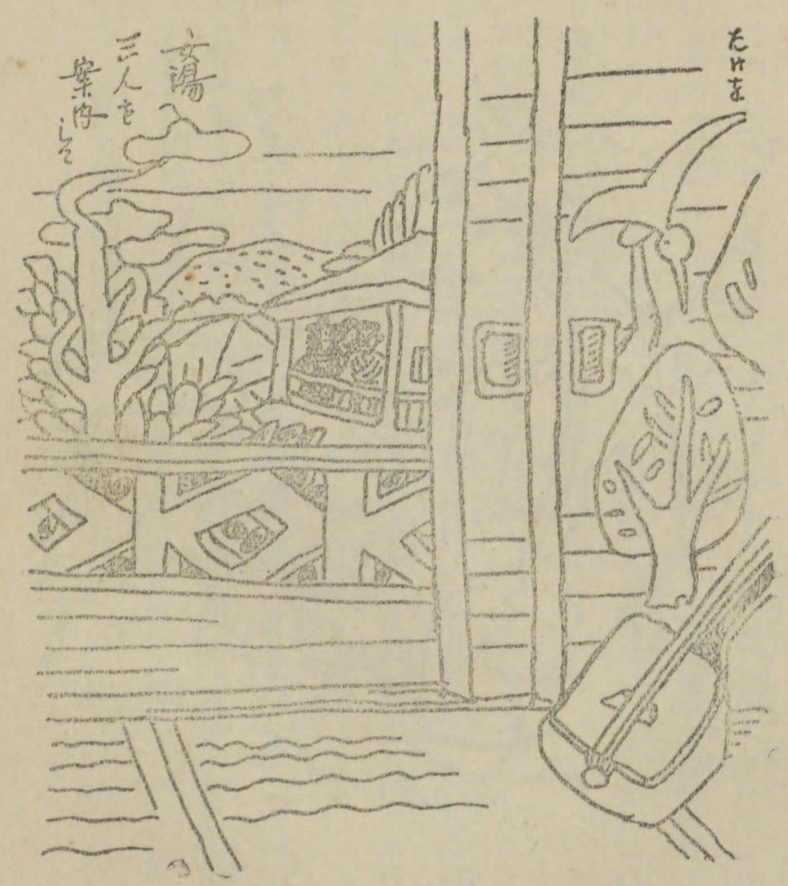
私の眼には久惠さんと、姉さんの二人が、そゞろ紅葉を身に浴びて逍遙ふてゐるのを見ると、まるで歌舞伎座の芝居でも見てゐる樣な氣がした。佳人紅葉狩りの圖とでも云ひたかつた。

三人はいつかな放れたくない面持だつたので、その際に私は大野屋を見ることにした。大野屋と云ふのは、誰かに私が山代では何處の旅館が一番い〻んだらう？　と其

れとなく訊いた時に、『そりや大野屋が一番だ。外の宿屋だと茶代に依つて客の差別をするから、氣持ちの惡いこと夥だしいが、大野屋にはそれがない』と告げたから、參考上見ておきたかつたのだ。既に豫め吉田屋さんにも左樣云ふてあつたんだが、此の前は電車の時間を急いだので、見る機會を失ふてゐたんだ。

大野屋の主人はまだ若かつた。修繕中ではあつたが、親切に一部室づゝを覗かせてくれた。靜かな氣持ちのいゝ私の好きな部室も二三あつた。さう斯うしてゐるうちに雨が降り出した。手入れ最中の庭を見て左樣ならをし、再びくらやへ來て見ると、三人はもう座敷の人になつてゐた。そこは一番高い場所の見晴らしに持つて來いの部室であつた。私は其處でも幾度となしに母人や姉なる人の感謝の言葉を受けた。久惠さんは相も變らず靜かにはしてゐたけど、そのほゝえみは總ての喜びを語るに餘りあつた。全部は仲よく其處でお晝の御馳走を喰べた。英ちやんアレー。

私は山代の湯は本當にいゝ湯だとすゝめた所、さつき入り際に一寸覗いて、その美



しさを知つてゐた三人は『それでは一寸入つて來ませう』と、手拭を下げておりて行つた。私は其の時久惠さんに代つて一階段毎にお母アさんの注意を怠らなかつた『まアまア豪い濟みまへん。わたしや勿體なうて協はん。あんた見たいな人がわたいの息子だつたらなア』と、茲でも又涙ぐみを見せるのであつた。

女湯へ三人を案内してから、私は男湯へきた。誰もそこにゐなかつた。入らうかナと思ふたけど、手拭のないのに氣がついた。今更貰ひに行くのも面倒と、私は餘りの美しさに、岩淸水の樣に藍色を湛へた其の湯を手で掬ふては興がつてゐた。それに飽きると今度はブラ〳〵と玄關へ來た。

フと何氣なく人の影が側にしたので、ツと首をもたけて見ると、半透明な硝子戸をすかして女の裸體姿が見えたのであつた。それは確かに朧ろげではあつたけど姉樣の立姿であつた。私は先方が若し私が其處に立つて見てゐたと知つたら、どんなに驚くだらうと慌てゝ身體を隱す樣にした。そして私は折角かの人達に抱いた神祕の尊さを

穢すまい爲めに、遠く身を退け、足音も立てずに二階へと上がつて了つた。ほつねんと坐つた時、私は『何故もつと見てゐなかつたのか』と云ふサタンの責苦にさいなみを覺えしめられた。

軈て久惠さん一人が上がつて來た。いつでも三人は放れたことがなかつたのが、斯うして一人で寄越さしたと云ふことは、私と云ふものに全然安心と信用を置いたに外なかつた。そう思ふと却つて三人が一緒にゐる時の樣な戯談も云へず、堅くなつて了つた。

『如何でしたお湯は。』

『本當によろしう御座いましたわ。先生もお入り遊ばせばよかつたに。』

同じ京都でも、學校へ行つてゐた丈けあつて言葉には京訛りを見せなかつた。

『今日は風だけが惜しかつたですね。』

『えゝ、隨分強い風ですもの』と、答へて氣がついた樣に、そつと頭に手をやつて鬢

のほつれに注意したりした。

そうしてゐる裡に姉さんが上がつて來た。

『イヨー美しいこと』私は姉さんと久惠さんの二人になつたので、斯う云つて戯かひの言葉が漸つと出て來た。

『ほツほ、吃度お湯がいゝからでせう。おーあつ』と、湯上りの所へ、幾ツかの階段が、すつかり彼女をほてらして了つたのだ。私共は早速お母アさんの着物を下へ持つて行くことにした。お母アさんに又上り下りが忍びなかつたからだ。

『こんな事なら此處で着代へずに、湯殿で脱げば宜うござんしたわねえ』電車の時間の次第に切迫して來たのを知つたので、そんな遲蒔な輕い愚痴も出た。

くらやを出た。電車に乘つた。次の停留場で平手君が乘つた。その時私は小さい聲で云ふことがあつた。それは私はパスだからよかつたが、三人は最初片山津を出る時、三等車ばかりだつたので三等の往復しか買はなかつた。所が今乘つてゐるのは二等だ。

私はまアいゝ〳〵と云ふて此處へ乘せた。だから後で若しや切符を調べ出した際、特別を以つていゝ具合に、と、頼んだ。平手君は『よし、よし』と頷いた。

最初發車驛を出た頃、三等の溢れかへつた中にゐた醉ふた男の二人が酒に力を籍りて、『構はないんだよ。構ふもンか』と、よろめきながら二等室へ入つた。そして婦人の前で云ふ可きでないいやらしいことを云ひ合つてはドッと笑ひ崩れたりした。私共は其の度毎に顰蹙して顏を反向けてゐたのだつたが、平手君が乘つたら急に『やア』と帽子を脱いで靜まつて了つた。帽子屋の親父だと云ふことであつた。その無斷で二等へ乘換へたことを車掌が知つてゐたので、それ等を追ひ拂ひたい許りに、殊に又平手君と云ふ支配人の前で、おのが職務の忠實さを見せる必要上『皆さん切符を拜見します』と、第一に來たのは姉さんの前であつた。姉さんは赤切符を出して眞赤になつた。女として他人の手前、こんなに氣極り惡いことは無かつたのだ。私は急いで首を振つて心配するなと云ふたけど、よく平手君に話しゝたと云ふ意志が通じなかつたと見え

て、唯モジ〳〵とし、果ては財布を慌てゝお母アさんから貰ひ受け樣とする狼狽を見せた。私は平手君をツ、いて早く何うかしてくれと暗々裡に唆かした。平手君は落着き拂つて『三等はあの通り滿員だから、臨機の處置として大目で見たら』と、半ばね、ぎらひをこめて云ふた。車掌とて强ひて檢札を好む所でなかつたから、云ふ通りになつた。

『あんな恥かしい思ひをしたことは今まで一度もありませんでしたわ。何だか女の癖に胡麻化して乘つた樣に思はれるんですもの』と、後で姉さんは思ひ出したかの樣に又赤くなつて云ふた。私は此の善良なる佳人の心に、このことが後に少しでも傷つけを與へやしないだらうかと云ふ杞憂を一時は考へて見たりした。けれども却つて又旅の面白可怪しかつたことの一つに數へられる好話題として、此の失敗が興味あつたことにも思はれた。

片山津についた頃、風も凪ぎを見せてゐた。

其夜片山津溫泉組合の重なる旅館主が私の爲めに歡迎の宴を開いてくれた。私は連日酒ぜめに遭つてゐたので、此夜程よい所で切り上げて來ると、三人は待ち設けてゐた樣に私の座敷へ來た。坐廻はちら〳〵と灯のゆらぐ湖を硝子越に樣々と物語つた。何と云ふ美しいゆらぎであつたらう。其の夜の話は一つ一つに心の底に浸み込むものがあつた。

『先生のお歸りになつた後の淋しさ。先生は孰方へゐらつしやるんです？　東京へお歸りですか。』

『實は其れを迷ふてゐるんです。關西の友人達から是非來いと云ふて來てゐるものですから、關西へ行かうか。それとも東京へ歸らうかと。一度東京へ歸つて了へば仲々出られませんから。そんな事を思ふと、關西の方へ軍配はあがるんですが。』

『お國は？』

『こちらです。此方と云ふて、此處から一時間程汽車に乘つて行つた金澤と云ふ所で

す。』

『まア金澤ですか。あすこには有名な公園がありますね。』

『それは兼六公園と云ふて、日本三公園の一つです。私は此の廿日間ほど毎日の樣に散歩に出かけました。故郷を賞めるも何んですが、あの公園は見事です。わけて紅葉は實に譬へむ方もありません。貴女方は態々京都から出掛ける譯にも行きませんから斯う云ふ機會に御覽になつておいたら如何です？』

『でも全つきり知らぬ土地は何だか不案内ですし。』

『若しお出でになる樣でしたら、直ぐ今此處から電話をかけて、私の友人を案内させることに致しませう。その友人は英君と云ふて、そりや私に劣らぬ面白い愉快な男で、又安心ですから。そして宿の方も一切いゝ手筈にしてあげますから。』

『まア、さうですか。若しそう願はれたら、そんな結構な事は御座いません。』

『では直ぐ知らせませう』と、私は電話を其の場でかけて、金澤の二七九〇番を呼ん

だ。續いて又宮保旅館と云ふ廿日間も今度私の滯在してゐた宿をも呼出して貰つた。

『それぢや私は東京へ歸ることに決心を定めませう。そこで急行に乘換へるのに廿分間停車しますから、その間に萬事友人と打合はせをして一切を托しますから。』

『では何卒宜しく。』

そこへ電鈴が鳴つた。二七九〇番が出たと云ふ。二七九〇番と云ふのは窪田夫人の家であつた。私は一度お別れしてお見送りまで受けましたが、明晩七時に金澤へつきます。廿分間ゐます。だから英君に是非傳へて欲しいと云ふた。最初英君の所へ電話すればよかつたかも知れないけど、多忙な君が若しや不在であつてはと云ふ懸念が此の用心あらしめたのであつた。續いて宮保旅館には先日まで私のゐた部屋を何うかして明晩都合してくれと依頼した。そして三人に、私は明晩五時四十五分に粟津を出發しますから、どうか其の時間の汽車に動橋から乘つて欲しいと云ふた。三人は小躍りするかの樣な喜びを見せた。

私は此のお母樣の紅葉が好きなのには全く驚かされて了つた。京の地の御隱居樣丈けあつて風流の道に長けてゐることも人一倍であつた。何を浮世に一つとして不自由のない身には、せめて四季折り〳〵の眺めが唯一の樂しみであつたかも知れなかつた。母は娘を喜ばさむが爲め、娘は又母の喜びを喜びとする美しい情愛を見ては、私もヂツとしてはゐられなかつた。神戸へか東京へかの迷ひは、この情愛の前に譯なく絆されて、私は神戸を捨てゝ東京にした。そして、せめて金澤まで見送り、友人に後事を托して、これ等の善良なる人々の上に少しでも幸福なる心の糧を與へたいものと翼ふものがあつた。

話が斯う定まると、私は矢田屋へ濟まない氣がした。折角いゝ客が泊まつて呉れたのを、さも私が煽動したかの如く思はれるのが苦しかつた。けれども二度三度語り合つた私の見る所では、仲々に理解のある物解りのいゝ主人であつたから、却つて詰らなく滯在してゐる客の心の上に斯うした變化を私が與へたことに感謝してくれるかも

知れぬとも思ふて見たりした。

いつまで語り合つてゐても際限のなかつた四人も、四邊の餘りに靜まりしに氣が附いた。各々は最後の灯のゆらぎに名殘りして、小さな聲で、『おやすみなさい』と、交はしたのであつた。

佳人舟遊の圖

何と云ふ美しく晴れた空であらう。雲一つない、風一つ吹かぬ。キラ〳〵と蒐象はたゞをだやかな陽に輝くばかり。私は正午過ぎ何うしても此處を立たなくちやならぬことになつてゐたので、早く船を出したいなアと思ふた。昨夜、湯の出で、明日若し天氣だつたら、實盛塚を見て頂かなくちやと云ふから、私も是非望ましいことだと答へておいたんだ。その時舟の準備も申し付けておきますからと云ふことであつた。そ

れを樂しみに起きたと云ふ譯ではないが、兎に角、眼が早くあいた。又なき此の日天氣晴朗ときた。私は早速仲居を呼んで、『御主人は？』と訊いた。すると『まだ御就眠になつてゐらつしやいます』と云ふ。『夜がいつでも遲う御座います代りに、朝もねえ』と、附け加へた。御尤もである。

私の眼醒めも常になく早かつたのだ。態々スヤ〳〵と眠つてゐる所を無理に起されることほど不快なことはないと、よく知つてゐる私は默つて自然が眼を開かせるの時を待つより外に道がなかつた。そこでブラ〳〵と廊下を歩いて行つた。やがて湯殿の前へ來た。何氣なく見ると脫衣場に紫に黃色の飛模樣のある着物が引ツかけられてあつた、若い女の着物だ。若い女が今中で眞裸になつて湯浴してゐるのだ。遊子の胸、豈に感慨無量ならざるを得んやである。速かに去つて淸風に吹かれんかな。

朝の食事の膳が引き下げられると同時に、久惠さんが一人で來た。

『先生、お暇でしたら、舞踏を』と、ニッと笑んだ。そこには最早馴れ切つた優美な

親しみが籠つてゐた。私には私と云ふものに何等の氣のおく所がなくなるまでに總てが安らかな心になつてくれた事が嬉しいことであつた。そして淨らかな氣持ちになつて、廊下に出て懇切に教へた。京都のお茶の水出だけあつて、覺えが早く、昨日と較べて全で別人の觀があつた程に上達した。折柄入つて來た仲居も感心して、

『矢つ張り御嬢樣と私共とは頭が違ひますわ』と、自覺の叫びを天高く張り上げた。程もなう母と義姉が、

『オヤ〳〵まア早いこと!!』と、いつの間にか足が揃ふ樣になつたのを見て、驚きながら入つて來た。

『ねえ、お母アさん、今から舟で實盛塚の方へ行くんですよ。何んでしたら御一緒にゐらつしやいませんか。昔、實盛が戰場へ臨んだ時白髮を染めて出たんです。敵が其の首をとつて洗つて見た所、始めて解つたと云ふ名高い話です。』

『何んだか聞いてまンな。然し先生、昨日もあゝお世話になり、今日もそんなでは濟

まんがナ。』

『いゝえ、私は一人でゆくよか、多勢の方が面白いんですから。』

『まア、お連れして頂いたら、そんないゝことは無いけどなア。』

『ゐらつしやい。少つとも構ひませんですから。』

三人の喜びは眼に餘る樣であつた。その人達が仕度の出來あがつた頃、主人松太郎君が起きて早速舟の手配を定めたと見えて、その由を告げに來た。私はどてらの儘であつた。

湖畔には一隻の和船の上に、淳朴な老船頭が煙草を燻らして待つてゐた。近づいて行くと素早く煙管ををさめて、棹を握つて立上がり、グイと舟を陸に押し付けた。主人は態々見送りに來てくれた。私を最後にして全部乘つて了ふと、スーツと一押し水を切つた。深みに出た頃、船頭は棹を櫓に代へて了つた。私共はヂツと立つて此方に顏を向けてゐた主人に最後の挨拶を濟まして、愈々茲に湖上の人としての眸を四邊に

故つた。

『何と云ふいゝお天氣でせうね。波一つ立たない。まるで鏡の樣ですねえ』姉さんの唇は先づ左樣云ふた。唇と云へば此の人の唇は紅も付けてはないが、眞赤であつた。

『さう、さう、茲に毛布があつたわ。先刻仲居さんが入れておくれやしたのや。お母さん寒がりだから、着やはつたら』と、姑につかへるに、貞淑斯くの如きかな義姉さん。

『宜しゆおす。あんた着なはれ。』

『いゝえ、私は少つとも寒ふおうへん。』

『ぢや斯うしまひよか、之を擴げて皆麼でおこたに焙つてゐる樣にしまひよ。』

『それ宜しいナ』と、私は口を出した。

毛布が擴げられた。そして皆麼の膝頭の上へふうわりと掛けられた。

此の舟の中ではをかしい言葉が流行り出した。それは私の金澤にゐる友人D君が、

一つ云へば二ツ目に言葉尻に『ごわして』と、云ふ句調を附けた。私もツイ面白がつて『ごわして』と、云ふた。例へば『そう云ふ譯でごわして、結構な次第でごわして』と、昔、西鄕隆盛の云ふた樣な言葉だ。D君も大方それを何かで讀んで、試みに使つて見て、何處かうまみを覺えたんであらう。間がな隙がな『ごわして、ごわして』と、連發した。

それが今茲で出た。

『久惠さんは蝙蝠傘を持つて來ることを忘れたんでごわして、顏に日がてか〳〵眩しいのでごわして、色が黑うなるかと內心心配してゐるんでごわして。』

すると、久惠さんは『アレー助けて』と、云ふ代りに兩手を觀音樣の手つきした。それが如何にも珍妙で且つ當を得てゐるので、一同は挫ツと崩れた。それからは何かと云へば『ごわして』が出、何かと云へば觀音樣の像であつた。こんな事が湖での樂しきさゞめきであつた。

船は艫て目指した岸についた。そこで上れと船頭は云ふ。最初一番先きに私が飛び下りた。續いて危なげなお母アさんである。兩手を取つてそつと下ろす樣にした。次は久惠さん。

『いゝわ、いゝわ』と、云ふたけど、まア〳〵と云ふて私は片手を出した。白い細い手が確ツかと握り締められた。微妙な神經が何か知らうごめいた樣に思ふて、思はれぬこともなかつた。最後に義姉さん。

少し登つて左の砂山は手塚山、向つて右に蘆で一杯になつた池があつた。齋藤實盛の首を洗つた所だから、首洗ひの池と云ふんだと船頭が教へた。それを聽くと、女達は何だか恐いものを見る樣に覗いて見た。

再び船だ。今度は川に入つた。一つの橋を潜つてから急に狹くなつて船は蘆と蘆との僅かの間を拔く樣にして進んだ。櫓は此處へ來ると棹に代はつて了つた。蘆は黃色に亂れ、鳥は啼き、天空は澄み、それに佳人舟にありで、そこら邊りへ來ると靜かに

口吟びしたい氣持ちがした。

舟は一旦水の盡きた所で止まつた。そこで一旦上がつて、又舟を新たにして漕いで行くのだと云ふ。蘆の深みの中へ舟のともさきを附けると、そこでも又一人々々の手を持つて助け下ろさねばならぬ。私の手は再び久惠さんに依つて握り締められた。

一同上がつた所へ、一人の田舍のおかみさんが駈け付ける樣にして來て、船頭と何か云ひ交はしながら、船の中の毛布を急いで抱えて、あちらへ走つた。見ると其處にも新たな川あり船があつた。

『まだ大分遠いのか。』

斯う云ふて船頭を見た。

『えゝ、まだ四五丁ございますだ。』

私は時計を出して見た。とても其處へ行つては平手君と約束した時間に間に合ひ相でもなかつた。私は總てのことに於て違約と云ふことが嫌ひであつた。さりながらツ

イ目の先きに實盛塚を控へてゐて、むざ〳〵歸るのも業腹であつた。英雄の心調茲に於てか糸の如く亂れた。やがて私は一散に駈け出した。そして今船の中へ具合よく毛布を敷いてゐるおかみさんを呼んで『その毛布もどせッ』と、大聲叱呼した。おかみさんは驚いて顔を見た。

『電車の時間の都合があつて行かれぬ。駄目、駄目』と、手を振つて見せた。おかみさんは折角の椋鳥を惜しや、こゝまで誘ひながらと腹立ち紛れに毛布をポカ〳〵と打つた。そして又再び戻つて來た。

『情けなや、時間が此の通りでごわして』と、私は時計を三人に見せて、

『仕方がないのでごわして。それでは此の邊をブラ〳〵散歩でごわして。』

『實に白砂青松がよろしうごわして。』

『ごわして、ごわして』久惠さんは交ッ返へして了つた。

そこの松林は實に美しい眺めと、清らかな感が深かつた。

『よろしゆおまンなアー』と、老いたる母人には生き永らへし身の喜びの瞬きがあつた。山、湖、林、川、見るもの皆秋の裝ひ。華麗にもあらず清凉にもあらず秋には四季のうちで一番詩があつた。

『松露がないか知ら。』

『あるかも知れませんねえ。探しませう。』

思ひ〳〵の松へ寄つて行つて、掘りかへして見た。松露は砂をむく〳〵眠れさしてゐると聽いたので、それを探した。

『おました、おました』と、お母アさん。

『どれ。アレー苔の腐つたのでごわして、アレー。』

賑やかな笑ひが松の林の中を囃し立てる樣にした。

『この邊は松露はありませんよ。もつと海の方へ寄つた所でなくちや。』

船頭は船に煙草を燻らしながら、教へてくれた。それでも如何にも有りさうに思は

れたので、未練がましく掻き別けて見た。

『おました。今度は確かに松露だつせ』と、又お母アさんが云ふた。屹度松の實だらうと手に取つて見ると、確かに松露であつた。

『年寄には惠みがあるものでごわして。だから今度は私の番でごわして』と、躍氣となつたが遂に見附からなかつた。そこへ船頭が來て、あれが鎧掛松と云ふ。ヌツクと太い枝がのさばり出てゐた。その下に地藏樣が鎭座した。無數の小石が積まれてあつた。どこの地藏さんでも、地藏さんには石がさんせんのお代りだつた。私事お氣の毒に思ひます。

船を歩いた所まで棹して貰つて其處から乘つた。三度び私は久惠さんを手にした。お互は其の度毎に何か感じたか感じないかは顏を見てゐては解らなかつた。つとめて二人は平氣を裝ふてゐた。

『少し急いで下さい』と、私は船頭に云ふた。時間がどうかと思ふたからである。船

頭は頷いた。舟は沖へ沖へと出た。私は昨夜、此の溫泉の組合長が、今夜もお泊まりでしたら湖へ燈籠流しでなく、焚火流しをして御覽に入れるんだと云ふた言葉を思ひ出した。

行きには手に持つた許りでゐたけど、歸りには久惠さんは純白のショールを肩にかけた。その美しさツてなかつた。まるで天下りせる人の如き神々しさを見せた。

『何と云ふていゝか、御光が久惠さんの身體からさす樣だ』と、云ふて、うや〳〵しく合掌して見せると、久惠さん驚いて急いで觀音樣のお手々を眞似して『アレー』

船が着くと、もう中出君が出迎への爲めに待つてゐてくれた。恐縮々々と私は氣の毒さを心から示して、直ぐ座敷へ歸つて大急ぎ仕度をして外へ出た。幾度も辭したけど主人松太郎君は矢つ張り見送つてきて呉れた。私は此の主人が好きであつた。謙讓な裡に負けツ嫌ひな男らしい所が賴もしかつたのだ。私は今少し悠つくり二人だけで語り合ひたい時間が欲しかつたのであつたけど遂に其の機を得なかつたことが、物淋し

い氣がした。

私には生涯思ひ出の多い片山津よ。今、私に心靜かに左樣ならと云はしておくれ。お前が與へてくれた樣々は皆私には感慨の深いものだ。平和に美しく榮えておくれ。私の二夜をあたゝかにして呉れたあの部室も、人も、湖も、灯も。總てよ左樣なら。

四百四病に藥はあれど

粟津へ着いたら、平手君と組合長の坂田屋旅館主が待つてゐた。風は寒かつたが天氣がよかつた。ブラ〳〵歩いて行く。

粟津は他の三溫泉と比して、昔さながらの古樸な所があつた。從つて野趣ある溫泉町であつた。だから私は他の溫泉の如く競ふて文化的に改良するよりも此處は此の儘にしておいた方が、却つて都人の好奇心を惹かないだらうかと考へられた。愁じツかの設備完全を期する爲めの文化式には我れ〳〵はもう飽きを覺えてゐるんだから。粟津は野趣横溢せる所を持つて特色として欲しいと思ふた。

坂田屋の親父は頭は禿げてゐたけど、思想は禿げてゐなかつた。彼は莫大な私費を投じて、左にある所有の山地に悉く施す所あつて、之れを粟津の一般客の爲めに開放してゐると云ふ。

粟津溫泉の起原と云ふのが面白い。昔、泰澄大師と云ふ坊さんがあつた。一夜お經を上げてゐると眠くなつた。まだ三昧に入らなかつたと見える。そこでうつら〳〵してゐると、夢の中へ白山大權現樣が出現まし〳〵て、『よツ泰澄よく寢てゐるナ。外でもない此の山から西南かなたに粟津の鄉と云ふ邑がある。そこから溫泉が滾々と湧いてゐるに係はらず、愚なる哉、里人之を知らない。汝行つて敎へてやれ。諸病忽ちにして治るぞよ』とお告げがあつたかと思ふと、夢がころツと醒めた。お伽話みたいだ。

そこで泰澄喜ぶこと限りなくときた。御尤である。早速粟津邑へ出かけて、溫泉は

何處ぢや何處ぢやと草をわけ、いばらにチクリとさゝれて探し廻つた。錫杖であちこちコツン〳〵した。するとビューツと上がつた。そら入浴れと泰澄さん我れ先きにと飛び込むと、いばらで刺された傷がコロリと治つた。ハテ妙ぢやと、それから來るわ來るわ、病人がうぢや〳〵と入つた。今から云へば治ると云ふ精神作用の働きが與かつて力あつたんだが、當時ぢやさうは云はない。何しろ白山大權現のお告げと、居眠りしたにしろ名僧と謳はれた泰澄和尚の高徳が背景をなして、治るわ、治るわ、遺言した許りの男が、溫泉に入つたが爲め、その晩から一杯きこしめして端唄をうたふと云ふ豪い騒ぎ。それが誠しやかに傳へられて、それゆけ粟津へと、遠近問はず出掛けて來たので、雷名一時に天下に上がつたんだと云ふ。これ偏へに白山大權現。有難や泰澄さんの居眠り。

その靈顯が、今でもあらたかと見えて、醫科大學を御卒業あらせられた山崎幹と云ふ正五位勳四等の立派なお醫者さんが、大權現様のお告げを分析して遺ると許り呼吸

器病、肺結核ございい、消化器病、花柳病ございい。あゝ疲れた、どつこいまだあるリウマチス、神經痛ございい、慢性腎臓炎とございい、貧血とございい、最後に婦人生殖器病と附け加へて、『皆さんわかりましたかナ』と、ウンと大金を頂戴し、『これも畢竟ずるに權現様のお蔭ぢや』と、ホク〳〵したとなん。

名所舊跡として粟津八景がある。養老公園がある。まだ外に澤山ある。我れつらつら惟みるに、粟津は四溫泉中でも一番泊り賃が安うござる。そこで粟津には長逗留の客が一番多く、從つて病後の保養者が一番多いと云ふことだ。箱根や別府あたりと比して半分にもならない。婦人生殖器病さん、神經痛、その他の方々さん、行きなせエ、行きなせエ、粟津へ行きなせエ。

坂田屋の二階は眞心こめて接待の用意が出來てゐた。羽織袴で主人御挨拶、私も御挨拶、それが濟むと、眞先きになつて、私は湯殿へ行つた。敢て權現様の靈顯が先入主であつた譯ではないが、粟津の湯は何處か外の三溫泉と比して藥湯らしい感が深か

つた。青ずむだ湯の上を白い煙が淡れて行く趣きの中に、何か知ら、他と趣きを異にする神祕がこもつてゐる樣な感がした。あがつてほか〳〵と、泰澄さんではないが、居眠りでもしたい良い氣持ちにさせられた。あゝあらたかや、あらたかや。

此處の溫泉組合でも私の爲めに歡迎會を開いてくれた。型の如く藝者が來た。私は粟津の歌をと所望した。

『わすれしやんすな粟津の道を、
粟津驛からすぐこれる』

『四百四病に藥はあれど、
粟津お湯ほど効きやせん』

靈顯は唄にまで出てゐる。

『小鳥喰ふなら粟津へござれ、
時をきらわず客を待つ』

これは僞り御座らぬと、坂田屋さんは云ふた。現に今膳の上へつむぎが出てお箸のつくのを樂しみに待つてゐる樣に、粟津では小鳥は無數にとれると云ふ。その樣を一遍ごらんに入れたいものです。實に面白いもンでがすよ、と自慢した。私はそれこそ粟津八景や養老園に優る興深いものだと相槌を打つた。私の横にゐた神谷さんも、粟津の小鳥と云ふたら有名なもので、態々東京から注文が入る位だと鼻を高くした。何千と云ふ小鳥が羽ばたきして曙の色まだ淡き頃の天を飛んで來る時の姿、それをヂツと待ち構へてゐる氣持ち。私はたまらなくなつて來た。

『粟津々々とつれない思ひ、
來れば逢はれる身でないか』

そうとも、そうとも。

『逢ふて笑へば別れに泣かす、
いつそ逢はず（粟津）にゐて欲しや』

そりや御無理と申すもの。

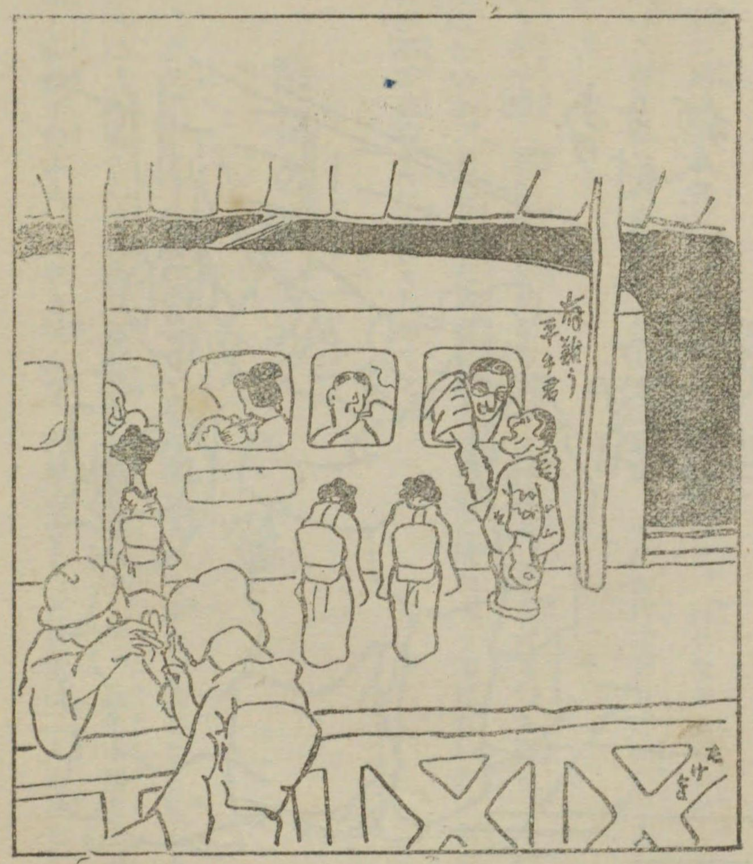
『鳥は鳥でも粟津の鳥は、

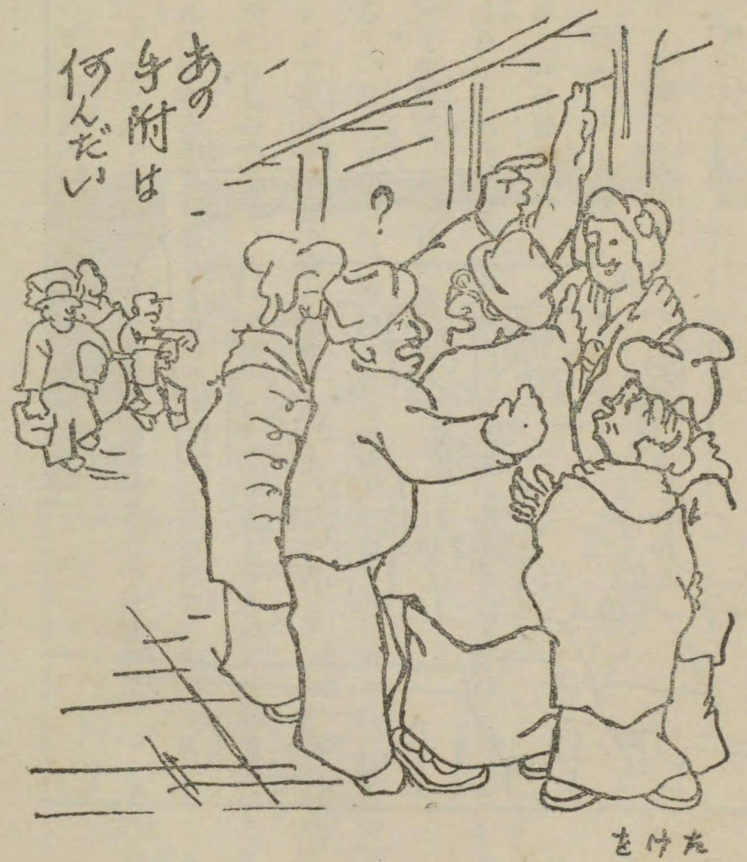
男喜ぶきげん鳥』

はい今晩はとおいでかナ。

その外可成きかされたけど、唄だけでなく本當に機嫌とつて貰ひたかつたから、『オイ、此方へ來てお酌だ、お酌だ』と、云ふた。

時間が來ると、私共は立つた。四溫泉廻りの幕が遂に下ろされる時が來たのだ。私はステーションで泌々平手君の顏を見た。有難う、平手君。十何年と云ふ年月は無言に二人を遠ざからしめてゐた。それがゆくりなくも測らざる機會が廻り合はしてくれたのだ。どんなに君と相見て嬉しかつたか。どんなに君は又この取るに足らざる私の爲めに盡してくれたか。晴れたる日から雨の日、霰まぢつた嵐の日さへも、君なかりし日はなかつた。舊友への尊き犧牲!!





今、私の胸は限りなき喜びを抱いて、平和な心と、新たなる精魂の甦へりを覺えて東へ東へと運ばれて行くのだ。美しき追想よ、そは山代であり、山中であり、片山津であらう。

有難う平手君、君の身に靜かなる祈りを捧げる。お互はもつと豪く、もつと強くならうではないか。そして更に再會の樂しき抱擁に浸たらうではないか。君が住む山代、我が平手君の上に幸あらしめてくれ。

深夜の訪づれ

ごツ、ごツ、ごツ、物凄い音を立てゝ汽車が入つて來た。若しやと見ると、約束通りであつた。久惠さんが窓から日本髷の眞白な顏を出して、物色の眼をみはつてゐたが、私と視線が合ふと、ニツと笑んだ。汽車の止まつた位置は二人に少しく距離あら

しめた。平手君も中出君も、だから氣がつかなかつたらしかつた。見付けたら、ピシヤリと脊中一本冷評かしたに違ひなかつた。坂田屋さんと雖ども默つて拳骨の御相伴をしたであらう。

私が乘ると室田君も一緒だつた。室田君は毎日金澤から山代の溫電まで通ふてゐるんだと云ふ。

私は昇降口に立つて、感慨無量な顏をした。汽車が動いた。互は首を下げた。帽子を振つた。

私はツカ〳〵と車内へ入つて彼方にゐる三人に近付いて行くと、いきなり『おウ！』と、呼んだ者がゐる、見ると堀辯護士であつた。永らく新潟で判事をしてゐた友人であつた。續いて又『おう！』と手を握つた者がゐた。これ又舊知の快活な北野金澤新報社長であつた。

『おう暫らく』と、堀君は意外な所で逢つたと許り『どこで乘つた？　粟津か。溫泉

廻りか、ほう左樣か』一言一句なつかしの聲であつた。その時又向ふの所で、『オーイ西川君、西川君』と、私の本姓を聲を上げて呼んでゐる者がゐた。珍らしや之れ又舊友の長田敏君である。長田君は醫者で、金澤の上田病院と云ふ大病院の實權を殆んど握つてゐる男であつた。私は又そこへ行つた。長田君は恰度三人の女性と同列の位置に腰を收めてゐた。

『いよーッ』と、私の笑みは零る〻樣だつた

『いよーッ』長田君も同じであつた。皆これ十幾年振りの邂逅であつた。『暫らく』『暫らく』斯う云ふてから、私は私の爲めに態々空席を設けてゐた義姉さんの側に坐つた。親しき笑顏の交換である。長田君はオヤ〳〵と眼をどん栗の樣にした。

『先生は、よう澤山知つとる人おますナ』お母樣が驚いて左樣云ふた。そこへ室田君が長田君と相對して坐つた。私は三人に紹介した。

今日湖から歸つて間もなく敦賀から知邊が訪ねて來たこと。それが私共の代りにあ

の座敷にゐてくれやすさかい宿へ對してあんばいようおましたと云ふこと、物の解つた主人やによつて、至つて出易うおしたと云ふこと、そんな事が話題になつた。

久惠さんは汽車の中で掛けたら油煙の爲めに黑くなると思ふてか、純白のショールを外してゐた。私は金澤驛へついたら、直ぐ掛けるんですよ。あれを掛けた姿つたら天女降臨でゴワしてと云ふと、久惠さん、今ぞ例の觀音樣だと云はん許りに、兩手で其の形をして『アレー。』

長田君や室田君は餘り我々が樂しさうにしてゐたので、ツイ釣り込まれては笑みを見せるのであつた。

『ねえ、先生。先生も一緒に金澤で泊つてくれやはると嬉しうおすがなアー。』

『さア。』

私は既に寢臺券を用意してゐたんだ。

『いくら先生の御紹介下さる人はいゝ人でも、矢つ張り始めて逢ふんどすやろ。戯談

も云へしまへん。斯うやつてワア〳〵となアー』と、お母樣が云へば、今度は久惠さんが代はつて、

『私、公園も見たう御座いますが、それよりももつと今の裡に折角覺えかけた舞踏を上達しておきたいんですわ。今夜でも敎へて頂けたら、どんなに嬉しいでせう。』

『アレー』と、私は觀音樣。

『ほんまにナ、この娘は永い間願つてゐたことを覺えかけたんどすやよつて。だけどなア、それでは餘りに先生に濟まンがなア。』

私には、出來るなら左樣して欲しいと云ふ腹がアリ〳〵と解つた。これだけ云ふ時には餘ツ程そこに切なる希望があつたに違ひなかつた。私は交際は極く淺くはあつたが、此の美しき母娘の情愛に動されて、ヂーツと考へ玆に再び金澤の土を踏む可く意志をひるがへして了つた。一應室田君にはかると、『出來るなら左樣して上げた方が』と、室田君も感激の士であつた。それではと私は、

『私も泊りませう。そして今夜も舞踏を教へませう、明日も案内致しませう』と、云ふた。

『えッ、ほんまどッか。』

『ほんまどす。』

『戯談よろしゆおまへんぜ』眞僞を確め旁々念を押した。

『本當ですとも!!』

すると、三人はほーッと息して、

『拜んますわ。先生濟みまへんなナー』と、心からの禮を云ふた。

そこで早速寢臺券の處分を室田君と二人で相談した。何でも發車前であつた場合には確か驛の方で半額で引取る筈だと云ふことを朧ろけながら記憶してゐたので、左樣云ふと『さアー』と、室田君も充分知らなかつた。兎に角萬事私にお任せ下さい、いい具合にしますからと、室田君は其の切符を私から受取つてくれた。私は表裏なき其

の親切さに、たゞ〳〵感謝の念にとざされて了つた。

その裡、いつの間にか金澤驛へついて了つた。何と時間が早いことであつたらう。夢中になつて話してゐる間に斯うだ。

ステーションには宮保旅館のお直さん、英君、窪田夫人の三人が出迎へた。英ちやんはッカ〳〵と寄つて來て、

『さア、直ぐ來い。チヤンと注文してある』と、手を引張る。何を? と聽くと、驛前の精養軒に晩餐の仕度を命じておいたんだとある。

『英ちやん、急に僕も一泊することになつた』と、云ふと、『アレーうれちいッ』と、獨嚙みついたが、『こりや精養軒へ濟まないことになつたぞ』と、急に沈思熟考した。

『まアいゝ哩。後でいゝ具合に』と、獨言しながら『アレー此の顏見たかつた』と、兩手で私の頰を持ち上げる樣にした。それを見て久惠さんはニッと笑つた。

『アレー美人。アレー綺麗な。』

久惠さんは其れを聽くと、私に急に觀音樣にして見せた。英ちやん茲においてか合點ゆかない。

『あの手附きは何んだい？』

『あれか。あれはアレー助けてーの有形名詞だ。』

英ちやん腹を抱へて、

『こりや旨い發明だ。君が發明したんだろ？』

『いゝや頭のいゝ御令孃の新案でござるぞッ』と、嚇すと、英ちやん隙かず『アレー』と、觀音樣。

その觀音姿そのまゝを私は三人に紹介した。三人も亦觀音禮を以つて之に應へた。これで互は始めから親しい仲の樣に、四角張ないで濟んだ。早い話が人徳でゴワしてアレー。

自動車をと奮發を見せる。一同乘つたら外に一人丈けしか加はる席がなかつた。

それを見た英ちやん早くも窪田夫人を押し入れて、僕は仁義の士だからと、威張つて見せた。

『それでは後で來い、いゝか』と、念を押して均しく觀音樣、自動車はサツと走つた。夜の街は何んでも美しいものであつた。わけて賑かな大通り許りを進むので電燈の絶える所ツてなかつた。『四條通りによく似てまンなナー』と、三人は交々覗く樣にした。窪田夫人は片町の宇都宮書店前で下りた。宿は直ぐだつたが、巡査が『其の道へ罷り相成らぬ』と、妙にひねくれたので、うねゝゝと運動會の樣に殆んど一周して旅館へ運ばれた。宿では第一に私を見て驚喜した。

『おや、貴方はゐらつしやらないと云ふんぢやなかつたんですか。』

『それが急に來ることになつたんです。』

『まア、よくまア』と、歡聲を心からあげて、

『貴方が先日お立ちになつてからと云ふものは全で火の消えた樣に淋しくなつて、昨

夜もお電話を頂きました時に、どうかしてゐらつしやればいゝと皆で噂してゐたんですよ。これは、これは皆さん、さ、どうぞ。』

『あの部室は大丈夫かい？』

『ハイ、もうすつかり用意を整へてありますから。』

その部室と云ふのは私の廿日間を起居せしめたなつかしの座敷であつて、三方庭の離であつた。私には机の前をあけた庭が一番氣に入つた。遠くに川のせゝらぎが聞え、柿の葉や實は日に日に深みゆく秋を思はせ、殊に梅もどきの眞赤な小さい粒は、朝窓を開いた時の何よりの樂しみであつた。全で珊瑚を鏤めた樣に枝にさかつてゐた。

だからその座敷には執着の強いものがあつた。私は此の旅館を宿にする以上、どうしても此の部室でなくてはならないと思ふた。殊に風流の道長けた京の御隱居樣には何よりも之が一番の慰めであらうと思はれたので、電話の時にも宿へ特に念を押したのだつた。

『ねえ御隱居さん。夜は此麼部室がと思はれるかも知れぬけど、朝のよさつたらありませんよ。夜は四邊が閉ざされてゐますからね。』

私は夜の其の部室は片山津のあの美しい部室と較べて格別の見劣りがしたので、特にさう云ふて失望を防いだのであつた。

三人がお湯へ入つてゐる間に、私は英君の所へ蓄音機を借りによつちやんを走らせた。

食事が濟む頃、其の蓄音機が座敷に運ばれた。早速控間の方へ總てを片附けて、私と久惠さんは舞踏をすることにした。最切は海軍軍樂隊の軍艦マーチをかけて、ワンステツプを踊つた。久惠さんはワンステツプはもう卒業であつた。これならよいと許り、私は女中に『皆麼に見においで』と、呼ばせに遣つた。と云ふのは、私が舞踏をよくすることを知つて、この前ゐた時に、是非一度舞踏と云ふものを拜見したいものだと代る〳〵私に云ふてゐたけど、此の宿には蓄音機がなかつたし、それに踊る相手

もなかつたので私は一人で試みて、こんなものだ位に見せておいた。然し舞踏は一人では到底想像の出來ぬものであつた。かれ等は活動で組になつて踊つてゐるのをよく見てゐるから、何となしに物足らない顏をしてゐたんだ。

そこへ測らずも絶好の機會に惠まれたのだ。早速大勢は障子の硝子の向ふへ、石垣の樣に顏を並べて見詰めてゐた。私は茲に於て花の如き、又京人形そのまゝの久惠さんを相手に巧みに踊つて見せた。一曲終つてから、

『どうです、此の御孃樣は單に昨日覺えた許りですよ』と、云ふたけど、どうしても彼女等は本當にしなかつた。それ程巧みであつた。私は敎へ甲斐も斯うも早いと眞に樂しい氣がした。

レコードは其の外、僅かに舞踏に合ふものは二枚しかなかつた。そこで石黑君と云ふ私の一番仲のいゝ友人の宅へ、彼が目下大阪へ行つて留守だと知つてゐたけど電話をかけた。そして令夫人にレコードを賴んで見た。令夫人は快ふく承知して直ぐ持たせてあげますと云ふた。そこには何廐名曲でもあつた。よく私は淋しくなると態々そのレコードを樂しみに聽きに行く日が多かつた。

生憎、折角の其のレコードは獨逸製の十二吋もので、何うしても其の蓄音機には大きくて當て篏まらなかつた。幾度か捻つて見たけど、小は大を兼ねる譯にはゆかなかつた。

同じレコード許りかけてゐても飽きる憂があつたので、私は夜の散歩をと云ひ出した。そして片町と云ふ此の市で一番賑やかな街から石浦町へ來た。先刻出迎へてくれた英ちやんの店の前へ來て、突然三人に『奥を御覽なさい』と、云ふた。三人は見た。

『おやツ。』『あらツ。』

又英ちやんの方で此方を見て驚いた。急いで出て來た。

『今夜は店の者全部を活動見物に遣りましたので、私が斯うして働いてゐる樣な始末でごわして』と、白衣の姿を見せて云ふた。

『豪いわな。そうして雇ひ人をいたわるお心て感心どすな』と、お母様は衷心から賞め上げたので、英ちやんは眼をシバ叩いて、返事に一寸困つた風だつたが、突然思ひ付いたと見えて『アレー』と、云ひながら觀音様にした。これには一同ドツと吹き出した。

英ちやんの家の隣はカフエーブラジルと云ふて、この市一番の高等カフエーであつた。そこの二階の一室へあがつて、コーヒを飲んで暖かい氣持ちになつた。テーブルの眞中に飾つてあつた菊を見て一同『よろしいナ、よろしいナ』と、云ふた。

宿へ歸つて時計を見たら可成の時間であつた。もう寢ませうかと云ふてゐる所へ、英ちやんが今漸つと皆が歸つて來ましたからと云ふて遲いながらも態々訪ねて來てくれた。そこで笑ひが更に新たに起つた。然しそれも際限なかつたので、お就眠と云ふて私は別室へ英ちやんを伴ふて來た。最早そこには私の夜具がちやんと敷かれてあつた。二人は横になつて眩つきしながら、山中で別れてからの話に耽けつた。鶴見君が

何か書いてくれと君の宅へ云ふて寄越すかも知れぬから、そしたら何卒一筆書いて遣つてくれなどゝ、英ちやんは友人の爲めに、蔭ながら務むる所があつた。私は今更の樣に彼が私に對してのみ厚いのでなく、總ての友人に對して深い友情のあるのに窃かに感に入つた。

その夜、英ちやんの歸りは遲かつた。

靜かなる別離

翌朝、公園へ行つた。小學校の生徒で、公園は非常な騷々しさを見せてゐたことは幽邃の感を妨げるものがあつたけど、一樹一石、みな彼女等の讃美の聲であつた。殊に山崎山と云ふに上がつて、そこのベンチで憩ひをしてゐた時、歌舞伎座の『桐一葉』の芝居を見てゐた時の樣に、黄ばんだ桐の葉が天に舞ふて落ちて來た。銀杏や紅葉

の葉も紅黄を亂して、一風毎に雪の如く天から降つた。それには一同詠嘆これ久うした。

『貴女はいつの日か金澤へ來るでせう。恐らく再び來る時があるか何うか、この百萬石の秋こそ貴女には乙女の名殘りでごわして。盡きやらぬ思ひ出とこそ云ふべけれでごわして。』

『アレー』と、觀音樣。

山を下りる時、一しほ風に落葉は舞ふた。

『よく見ときなはれや。名殘の風情を。』

私が微笑して斯う云ふて久惠さんを振返へると、久惠さんも矢つ張り笑みを湛へて其れを受けた。そして今更の樣に眸を空にして、なつかしむ色を浮べた。

下りた所の紅葉の一樹は左迄に大きくはなかつたが、その葉の大きくて、眞紅に盛つてゐる見事さは、鷄群の一鶴の感があつた。お母樣は其れを一葉京へお土產に持つ

て行きたいと云ふた。そして皆に誇りともし、又この奇しき旅の偲びにもしたいと云ふた。私はそれではと靜かなる落葉を待つた。生憎その紅葉に限つて一葉も散りを見せなかつた。そこで惡いとは思ふたが、まさか此の風流を、誰ぞ咎めむと許り、ツと伸び上がつて一葉をつまんでパツと放した。手には紅の一葉のみが殘つた。お母樣は其れを大切にして、紙と紙との間に狹んだ。

ぐるりツと一まわりした形になつて、今度は公園內にある圖書館の横へ出た。私は青年の頃、この圖書館に毎日姿を見せぬ日とてなかつた。目星しきものは大概讀破した。私の筆に育みを與へた過半は、こゝに俟つ所が多かつた。私は其處をも一寸見せたい氣がしたので牧君に一通り案內して貰つた。私は日本で之れだけ清潔な、これ丈け靜かな、これ丈け又學びに相應わしい圖書館は恐らく全國にあるまいと聽かせた。

食堂でお茶を飲んだ。さつきから咽喉が乾きを覺えてゐたのであつたが、お互にそれを口に出さなかつた丈けに、そのお茶は全く甘露に價するものがあつた。

斯うして私は私の推選した兼六公園の案内役の任を無事至うした。宿では既に注文してあつたので、つむぎのじぶと云ふ此の地獨特の料理を食膳にのぼせてくれた。これより先、今朝私はつむぎと云ふ小鳥を片山津で喰べませんでしたか？　と聽いた時いゝえと三人は首を振つた。あのおいしい鳥をと云ひながら、私は油の乘つてゐることと、肉の引き緊つたうちに何處か柔かな所があること、料理法又天下一品であること、そんな事を並べ立てゝ、殊更に注文しておいたんだ。それを皆は、『これは旨味しい』と、本當に舌鼓みを打つた。いつも食慾が驚く程進まない義姉さんまでが、綺麗に喰べて了つた。外の肴も皆箸つけられた。私には斯うしたことが、この君達の期待を裏切らない心地せられて嬉しかつた。

斯くて時がきた。私は停車場まで見送つた。私は私の心で三人を茲に祈つた。

『貴女方は今、あか〳〵とした夕暮れに照らされた美しい萬物の秋を、心ゆく許り汽車の窓から味はつて行かれます。北國の秋は貴女方を喜ばすに、最後の力強い色彩を

見せることでせう。軈て其の色が暗に閉ざされた時が、片山津に着く頃です。あなた方の知邊も、主人も、仲居も、顏をともしびにして迎へるでせう。湖は又あの灯の色を浮べてゐるでせう。どうかお母様おすこやかに、二人の君よ、御幸福に』と。

『先生、赤の他人の私共に、親味も及ばぬ御親切、どう申し上げていゝやら』と、お母様は眼に涙して、

『どうか先生、京の方へお出での節は寄つておくれやすや。屹度どツせ。皆麼で五條に出迎へに出まン。そしたら私の家を宿にしてゆつくり泊まつておくれやすや。かたう約束しまン』と、眞心あふれて重ねて云ふた。私は別れの淋しさを無理に華やかに紛らさんものと、

『ねえ御隱居さん。京都と云ふ所は、お菓子を出すにも盞のまゝ出して、どうか召上れ、召上れと云ふ相ですね。まさか客から盞をとる譯にも行かず、ツイ其儘左樣なら する相ですね。それ程京は金を貯めては着物を作る相ですね。京の着倒れと云ひます

さかいなア。』

『そんな事ありやへん、そんな事よその國の人の惡口やがナ。家はそんなこと決してありやしまへんよつて御案じなう。京饅頭を山盛りにして出しますわ。』

『ハツハヘヘ。』

『本當どツせ。あんたがお出でやした時、蓋を態と二時間も前からとつときますわ。蠟燭がとまつても知らんわ、塵がかゝつても知らんわ。氣前ようおすやろ』これには一同聲を合はせて笑つた。

その愉快なさゞめきも一時であつた。互は何うしても、別れの前には淋しい滅入りを感ぜざるを得なかつた。私は汽車の中へ入つて暫らくの停車時間をむさぼる樣にして語り合つた。然しそれもタイムの力の爲めには協はなかつた。私が車内から飛び出した時、汽車は既に信號を終つて動き始めてゐた。お互は左樣ならと云ふことも出來なかつた。たゞ首と首で、懇ろな挨拶をするに過ぎなかつた。そこには淋しい遺る瀨

ない思ひと、感謝の二つがこめられてあつた。

生ける哀人形は斯くして西へ西へと黑煙を空にのこして運ばれて行つた。一日として憂ひを浮べなかつた私の顏も、始めて其處に犇々と迫まる哀愁に襲はれてならなかつた。

湯よ、山よ、湖よ。

『アレー英ちやんッ』斯う云ふて、私はステーションから英君の所へ駈け付けた。

『アレ、アレ、アレ、來たか、來たか、うれちい。』

『今、三人を見送つて來たんだ。』

『ホウ、さうか。喜んで行つたろ?』

『ウンニヤ。』

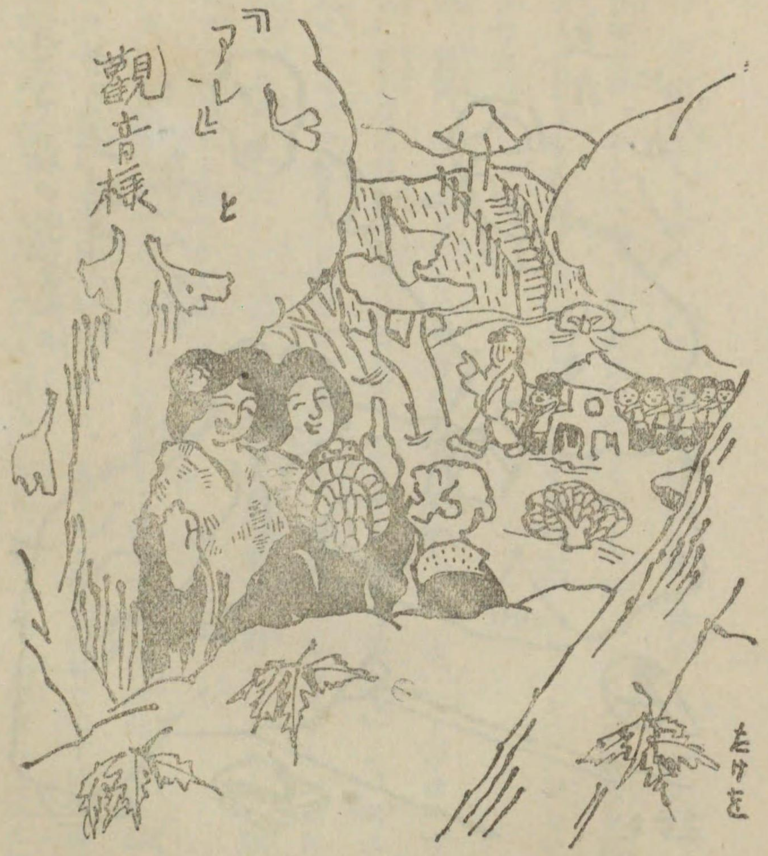
『さ、さ、君の出發にはもう二時間しかないんだぞ。上れ、上れ、凧たこ上れ』と、私を二階へ招じ上げた。英ちやんは私共が公園へ行つてゐる留守中、宿へ電話をかけて、今日の夕飯は此方へ來てくれと云ひ置いてあつたんだ。さうでなくても私は英ちやんに少しの時間があつても逢ひたかつたんだ。英ちやんも亦見たかつたのだ。アレ戀仲アレー。

酒肴は直ぐ運ばれた。

『これ見い、君の好きなこうばく蟹がある、つむぎがある。それにお刺身アレー。まだ此麼物があるぞ。田にしだ。これを君に喰はさうと孰れだけ妻が駈けずり廻つて探して來たのかも知れぬぞ。故郷の香りは田にしでごわして。有難う云はんか。』

『有難う。』

表では笑つてゐたけど、私は心の中でひそかに嬉し涙をほた〳〵させてゐた。英ちやんならこそと感謝が、いつしか聲をゆるませた。



電話に依つて窪田夫人も來た。窪田夫人は女だから酒は不可ないと云ふて、故更に葡萄酒を取寄せた。そして『大兄の健康を祝さう』と、幾度も大兄の健康を祝した。その度に夫人は飲まなくちやならぬ羽目にされて了つた。いつしか白い美しい顔が赤らかに染まつた。

『ホウ美觀、美觀、居ながらにして那谷の紅葉でごわして』と、二人がはやすと、夫人は『心臟に蛙飛び込む水の音でごわして。悸々するのでごわして』と、云ふて、『もう健康を祝すことはお許し下されでごわして』と、胸を壓へてヒイ〳〵云ふた。

永遠に讃美歌の必要のない最も華かなる性格の所有者が、斯うして三人も揃ふたんだもの、天下は明るくも賑やかであつた。

時は來れり。窪田夫人のほんのりが聊か超過してゐますから何卒此の儘お歸りをと切に云ふたけど、友情に人後はない筈ですと、英ちやんと一緒になつて停車場に來て呉れた。私共は赤い顔で、愉快に大きな聲で、互に左様なら、左様ならと云ふた。

ホツとして、私は寢臺に腰下ろした。すると今し方、可成りの女性の見送りを受けた脊の高い洋裝の女性が、私の隣りに位置をしめてゐることに氣が附いた。二人は知らず〳〵のうちに言葉を交はし始めた。此の女性は人見絹江と名乘つた。人見絹江と云へば我國女子運動界の權威であつた。私は彼女が餘り高いので試みに身長は？　と訊いた。私よりか四分低いが、日本女子としては、未曾有な五尺五寸六分だと答へた。ジャンプの選手だけに、聲と服裝だけは女であつたけど、外は殆んど男であつた。如何にも運動家らしいキビ〳〵した淡泊な所があつた。

彼女は上段、私は下段、二人は互に疲れてゐたので、それ〴〵寢臺の中へもぐつた。

醒めた時は、高崎、次に赤羽、それを乘換へて池袋、澁谷、私は久々で私の家を見た。我が家は流石に嬉しいものであつた。次の日、私は左の書簡を山代にある溫泉鑑軸株式會社から受取つた。

『拜啓、晩秋の候、愈々御多祥の段大賀此事に奉存候。陳者遣般弊社が其の沿線

に先生の御迎遊を懇請仕り候處、早速御快諾を得、御多端の折柄にも不拘特にお繰合せ御光來成被下難有奉拜謝候。然るに御滯在中は御遊覽の日程其他萬端行屆不申、剩へ期は晩秋に際し風情まだ見るべきもの尠なく、定めし御期待に添ひ兼ね候事と奉恐察候、今次先生の御來遊は必ずや當地方の發展に資するの甚大なるもの可有之と想像し、深く感謝に堪へざる次第に御座候。尙今後とも一層の御援助を賜り度奉懇願候。右不取敢御禮申述度寸楮如斯御座候。敬具。』

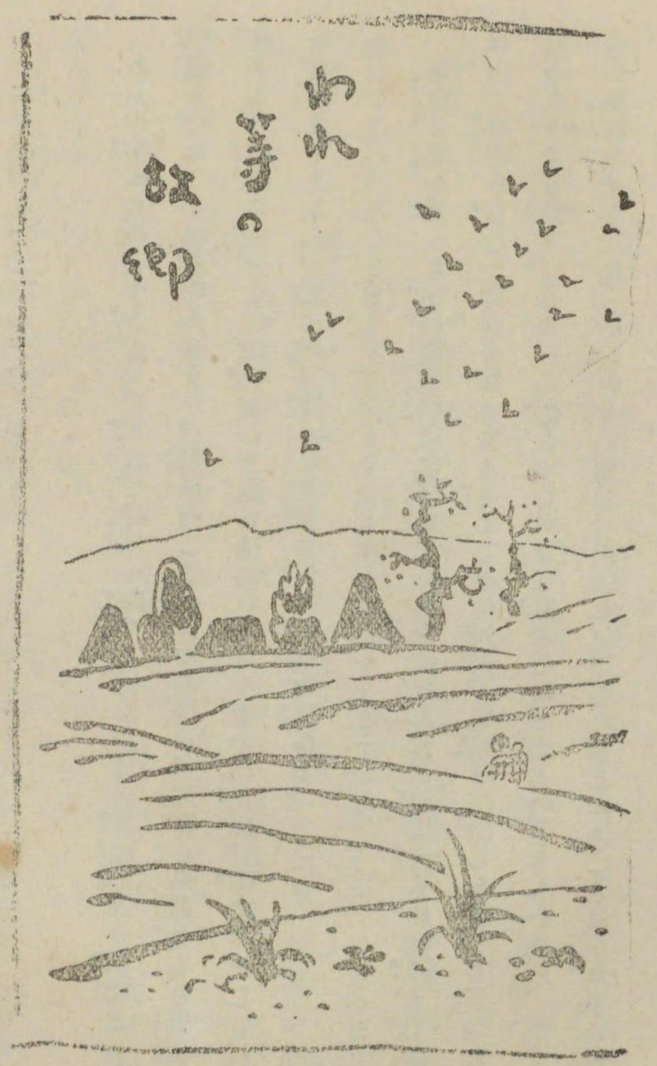
私は押し戴いて、私こそ深く感謝に堪へざる次第に候と物云ふた。

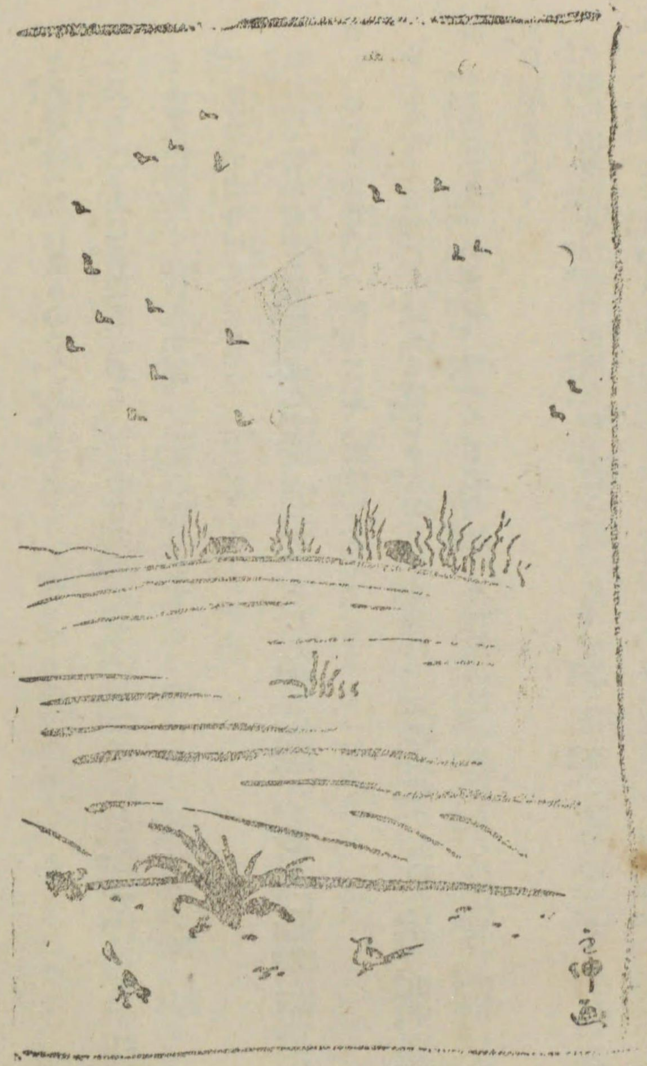
續いて、、、あらや、吉野屋、矢田屋からもそれ〴〵叮重な挨拶狀に接した。最後に私は水莖の跡實に美はしい、まるで紫式部の子孫の書いた樣な一通の封筒を京から入手した。これぞわれ等が久惠さんからであつた。取る手遲しと許り私は封を切つた。

「落凋の秋も一雨ごとに一入あはれさを增すばかりで御座います。先生には其の後おすこやかにお過し遊ばして居らつしやいますか。お伺ひ申上げます。永々の御旅

行でさぞ〳〵お疲れ遊ばしたこと〻お察し致して居ります。
さて旅行中は不思議な御縁で先生にお目にかゝりまして一方ならぬ御親切なお世話をうけ、其の上結構なお品を頂戴いたしまして、まことに有難く厚く〳〵お禮申上げます。
また金澤驛では此の方よりお見送り申す筈の所を態々先生にお見送り頂きまして、まことに恐縮致して居ります。考へて見ますと私共は本當に幸で御座いました。幸ひな折に旅行致しました。先生にお目にかゝりましたが爲めに私共には屹度一生涯忘れ得ぬ愉快な有益な印象深い旅行だつたと存じて居ります。歸京後一日として先生のお噂を申上げてゐない日は御座いません。
澄み切つた大空を仰いで小鳥の聲を聞きながら蘆と蘆とに挾まれた細い流れをすべつた事も、よろしいなア……と京の感歎詞を連發致しました紅葉のお庭も、兼六公園の桐の葉のハラ〳〵と散る風情も、靜かな夜の沼の美しさも、あれやこれやとみ

な思ひ出の種になるのでございまして。
一兩日のうちに御粗末ながら心ばかりの品をお送り致したいと存じて居りますからどうぞ御笑納下さいます樣、お願ひ致します。
代筆にて久惠。』
私はにこ〳〵と幾度繰返して讀んだか。そして其の筆蹟の見事さに幾度恍惚としたか。あゝ久惠さん、義姉さん、御隱居さん。
ゆくりなくも旅にて逢へる麗しき人の上に幸あれ。また山代からの九谷、山中の漆器、片山津の朱塗の火鉢、粟津からの白絹、それ等の贈り物は永しへに我が懷かしの思ひ出とならう。
名峯白山を仰ぐ加賀の四溫泉の上にみ榮へあれ。旅より東に歸りし子は、今あこがれと、喜びに、唯わなゝきを覺える。
湯よ山よ水よ、げに大加賀は美はしき哉。





旅のエピソート

あゝ十年振り!!　十年振りで私は今故郷へ歸つて行くのだ。故郷金澤は私にどんな變遷を見せてくれるであらうか。私はそこに大きな期待と、好奇心の夥だしい動搖を感ずる。故郷の山河には依然として變りはないだらうけど、人に、街に、そこには何を見出すであらう。私は今、樣々な追想の入り亂れを覺ゆる。

……

軍隊生活を終へた私は豫備役には召集せられずに濟んだ。後備役も此の樣子では或は其の必要を見ないのかも知れぬと思ふてゐた矢先、突然呼び出しを喰つて了つた。私は久々で軍隊を見ることに何となく胸躍る氣がした。樂しい新らしい生活、而かも私の生涯を通じて最も印象の多い生活。再びそれに觸れると云ふことは少からぬ好奇

心を咬られるものがあつた。私は單に軍隊生活ばかりでなく、この機會に故郷の土を踏むと云ふ喜びがあつた。いざ、いざ。私は只管に其の日の迫るを待つた。

……

早大のグラウンドで野球仕合を見た私は、直ぐ其の足で池袋に來た。時間を打ち合はせてあつたので、妻も子も色んな私の荷物を持つて待つてゐてくれた。それではと左樣ならする。赤羽驛で汽車に乘りうつり、一旦寢臺に落着いてから、かねて手紙で申合せをしておいた吉田君が乘つてゐるか何うかと二等室の方へ顏を出すと、吉田君ばかりか、將校服で密田君も一緒だつた。『よーツ、君も召集か』と、聲をかけると『みんな一緒だ。面白いぢやないか』と、堅く握手をした。吉田と僕は同年で、密田君は其れから少しく遲れて入營したんだ。

私と吉田君とは色んな同舊談があつた。あの大尉は何うしてゐるだらう。中尉の誰それは最早少佐だぞ、などゝ餘り大きな聲を出したものだから、他の客の中には耳を

濟ますものもあれば、話の面白さに釣り込まれて、微笑を湛へるものもあれば、中には五月蠅さうに顔を歪めるものもゐた。そのうち眠たくなつたから、失敬と云ふた。

二人は寢臺が賣切れてゐたと云ふて羨し相な顔をして見てゐた。

寒かつたので、仲々眠れなかつた。それでも汽車は富山縣に入つてゐた。富山市に着くと吉田は其處で下りて行つた。故郷だからと云ふた。

『ねえ君、あの隅にゐる女。あれは僕の顔ばかり見てゐるから、僕に參つてゐるんだ』と、密田は云ふた。今まで氣が附かなかつたが、小さい三四歳の子供を抱いて、色は淺黑くはあつたけど、眼には何とも云へぬ魅力を持つてゐた女が如何にも密田君の云ふ通り、成程ヂツと此方へ瀧いでゐた。

『まさか君ぢやあるまい・僕だらう。』

『いゝや僕だ』と、十年前に若返つた樣にハツシヤグこと。現に軍服を着てゐたり、又は軍隊生活に入ると云ふ勇敢な氣持ちには、何うしても其處に今まで隱れてゐた生

生したものが飛び出して來るものらしかつた。斯うして寄ると障ると女を話題の中心にする所を見ると、どこか若々しいものが蠢めいてゐたんだ。

『あゝ悲觀、悲觀、あれは何うも君を見てゐるらしい』と密田君。

『漸つと今にして其れが解つたかい。僕は始めから左樣思ふてゐたんだ。』

『こいつ、自惚やがつて』と、ビシヤリと脊中を啖はして、

『成程、男振りと來たら、僕かア君に協はんよ。ぢや讓る、讓る』と、淡泊顔を撫で乍諦めの一瞥を又彼女にくれた。その時私も一緒に見た。女は此方の視線が自分の方へ來たかと思ふと、直ぐ眸を落して了つた。その女には何處か妖婦型があつた。多情な所が眼に潜在してゐるかの樣に、奥深く何物かゞひそまれてゐた。

いつしか歴史に名高い倶利加羅峠近くへ來た。そこら邊りへ來ると流石に北國の氣分は犇々と胸に哀愁を帶ばせてきた。同じ全國に變りなく照り付ける日光であつても、そこに何處か淋しい暗いものがある樣に思はれた。私は穴倉へ押し付けられる樣な、

大聲あげて泣きたい樣な不思議な現象に捉はれて來た。哀愁だらうか、寂寞だらうか、陰憂か、頽敗か。私は始めて默り込んで了つた。そして何も見まいと瞑目を續けた。

倶利加羅を過ぎた。次の驛も、又その次の驛も過ぎた。私は愈々十年振りの金澤へ來たんだ。心氣自ら湧き立つて來る樣な氣持ちだ。私の眼は大きく見開かれた。そして見盡せるものだけ見盡さうと窓邊にヒタ寄せにヒタ寄つた。やツ向山だ、あの大きな眞白な建物は何だらう。あの橋は？　森は？

ピタリと止まつた。愈々着いたんだ。殆んど友人と云ふ友人には石黑君以外は知らさなかつたから、石黑君だけは來てゐるかもしれないと思ふた。然し其の石黑君の宅へも直ぐ行く事にはなつてゐたし、又出迎へなどと云ふ業々しく改まつた仲でもないんだからと、期待もせずに下りると、いきなり肩を叩いたものがゐた。矢つ張り石黑君だ。『よう、來て呉れたのか』私は當にしないでゐた丈けに嬉しかつた。

『藤田研二君も來てゐるよ。』

『ホウ？』と、云つてゐる所へ藤田君はにこ〳〵笑顏を見せて帽子を脫つて呉れた。

『やア今度は色々有難う』私は斯う云ふて眞先に禮を述べる所があつた。實は外でもない私は今度將校として召集せられたんだが、僅か廿一日間だけだからと、單に軍服のみを新調して、マントと劍は石黑君を介して、藤田君に賴んであつたんだ。藤田君も矢張り後備將校だつたからだ。藤田君は快よく其れを承知して呉れたと石黑君から知らせがあつたので、私は何よりも先きに感謝を表したのであつた。

私には色々な軍人の知己があつたけど、誰それと云はずに、いきなり藤田君を頭に浮んだのは、藤田君の昔から友情の厚い親切な善良な氣風をよく知つてゐたからであつた。

『濟まないね、出迎へて呉れるなんて。』

『石黑君から聽いたものだから。』

などゝ云つてる横合で、女が小さい聲で左樣ならと云ふた。思はず振返つて見たら、

今まで列車に乗つてゐたあの女だつた。女は私と視線が合ふと、ニツと媚ある笑みを浮べて、無言の挨拶に代へた。そして私共より二間ほど彼方に立つて、車を呼んだ。

『誰だい、あれは？』

『知らないんだよ。』

『嘘付けッ、知らないものが左樣ならと云ふかい？　それに君が矢つ張り左樣ならと云ふたんだつたら、公明正大で話が判るが、君は恰も我々がゐるのを憚る樣に、ウンともスウとも云はなかつた所が、どうも怪しいね』と、不審相にした。私は『おーい密田君來てくれッ』と、證人にしやうと思ふたけど、いつしか密田君の姿も見えなくなつてゐた。サツサと行つて了つたんだらう。

その時女は？　と見ると、もう車の上に乗つてゐた。車夫が梶棒をぐるりと廻轉したかと思ふと、早くも動き出した。若しや私の舊い知つた女でもあるのかと、どうも今しがた云ふ左樣ならの言葉が氣にかゝつて、チツと見詰めたけど、どうしても思ひ

出せなかつた。

女には十年と云ふ年月は、男と違つて變遷の甚だしいものを與へた。私は娘から人妻へ、人妻から人の子の母へと云ふ幾變轉を見た其の過去の顏を知りたくてならない氣がした。

『オイ何をぼんやりしてゐるんだい？』

『別れが辛いのかい。』

二人は交々そんなことを云ふて、冷評かした後、

『どうするのか、俥か自動車か。君は成金だ相だから自動車を呼ばうか。おーい。』

『ま、まて〳〵、僕は俥だ。』

『何うして？』

『貧しきに甦へるのさ。』

『うはツはゝ。こいつあ宜かつた。うはツはゝ。貧しきに甦へるときたナ。ぢやこツ

と待て。

オイ俥。』

『エー何チョウ。』

『一臺だよ。』

『オヤ君等は？』

『あれ見い、金澤には電車があるんだぞ。十年前と較べて轉た隔世の感ありか。さ、乘れ、乘れ。』

『ぢや諸君失禮』私はトランクだの、靴だの、籠だので、すつかり押し込められて了つた。二人は甦へつた〳〵とキュウ〳〵腹を抱へて見送つてくれた。

永らく百萬石の城下を遠かつてゐた身には、北國第一の大都會とは云ふものゝ、多年東京に住み馴れた眼には幾程繁華になつたとは聽いてゐても、矢つ張り寂しい暗い所があつた。それでも故鄉に着いたと云ふ喜びは其等と戰はせながら、始終私の頰に

笑みを浮べさせてくれた。私はうどん屋と書いた眞赤な提灯などを今更の樣になつかしげに振返つたりした。俥は宿へ向けて走るんであつたけど、私は途中高岡町に廻はつてくれと云ふた。そこには私の弟の無二の親友である林政武君がゐた。林君は今全國の地方新聞中で二三を爭ふ勢力のある北國新聞の社長で、私とも淺からぬ因緣があつた。そこへ立寄つて心ばかりの手土產を置いて、母の言葉も取次に傳へたまゝ急いで出て來た。まだ朝が早かつたので、それに私が可成疲れてもゐたので、いづれ機を見て、ゆつくり逢はうと思ふたのであつた。宿は下柿の畠の宮保旅館であつた。これも石黑君が總ていゝ樣に段取りしておいてくれたのだつた。私には其の邊が生れた家に近くもあつたし、よく又散歩にも歩いた所だつたので、態と其の邊りをと石黑君に注文してあつたんだ。私は久々で水車の形を見た。川のせゝらぎをも耳にした。

宮保旅館の玄關に立つて、大方話がすつかりついてゐるんだらうゝ思ふたから、私は『石黑君の紹介で、東京から』と云ふた。『さうですか、どうぞ』と、許り、私は直

ぐ一室に導かれた。

『お喧しう御座いませうけど、暫らく我慢して下さい。直ぐ二階へ御案内しますから』

と、云ふ口上であつた。成程實に喧ましかつた。恰度普請最中だつたので、何だか落着きがなかつた。私は早速石黒君の所へ出かけ様と立上つて、廊下へ來た時に、ピタリとおかみさんに逢つたから云ふた。

『若し西川又は奥野と云つて電話があつた時には其の名を訊いておいて下さい。』

『えッ、奥野さんて、他見男さんと仰言るんですか。』

『さうです。』

『ま、ま、左様でしたか。さうとは知らずにコレハ〳〵飛んでもない失禮を。恰度石黒さんから東京のお客様二人を今日紹介なすつて來てゐましたので、實はもう一人の方だと思ふてゐました。まア、まア、本當にどうも』と、慌てゝ私を案内して離座敷に來た。そこは八疊と六疊の二間つゞきで、三面庭と云ふ理想的な部室であつた。私

には奥の庭が一番好きであつた。遠くに小川の流れが見え、近くに柿の大きな葉が色ばみ、わけて梅もどきの眞紅の實の美しさは、どんなに喜ばせたか。

『これはいゝ、實にいゝ部室だ』と、私は快然とした。それから石黒君へ早速手土産を風呂敷にして出かけて行つた。謹厳にして眞面目な石黒君は私の最も古くして畏敬する人物であつた。總ての家族は聲を放つて私の姿を喜んでくれた。私は心盡しの歓ある歓待を受けてから、兎も角もと二階へ上がつた。

私には思ひ出の二階である。私は青年時代この二階で、彼の有してゐる總ゆる藏書を讀んだものであつた。私を筆の人にして呉れた無形の育みは實に其處から生れたものであつた。その日、私は遲くまで親しき微笑を彼と絶えさなかつた。

天つ晴れ將校として

翌日、私は愈々軍服の人となつて、嚴めしい將校服姿で朝早く出かけて行つた。途中で私は兵士の敬禮を受けて徐ろに答禮した。不思議なもので、軍服姿になつて了ふと十年も軍隊から還かつてゐた身でも、總かり軍人氣質になることが出來た。衞門にさしかゝつた時、歩哨は捧げ銃をした。出來るだけ嬉しさを引き締めて、一歩を踏み入れると、恰も衞兵の交代時間であつたと見えて、多くの兵士が一隊になつて整列してゐた。そこへかゝつたのだ。忽ち指揮者の號令は天に高かつた『氣を附けッ』彼等はビシリと不動の姿勢になつた『かしらッ右ッ』あゝ乃公に一さいに敬禮したんだ。うッ、うッ、嬉しいではないかッ。已れはほーッと赤らみを頰に覺えた。これではならぬと思ふたんだけど、うッ、うれしいんだッ。

それからと云ふものは兵士があちこちでビシャッと立止まつては不動の姿勢で敬禮する者が多かつた。總身いたづらにわなゝくのみ。

指定の室へ入つて行くと、まだ誰も來てゐなかつた。たゞ一人向ふをむいて何か頻

りに書いてゐる男がゐた。その後姿が如何にも豐岡君に似てゐたので、そつと後から覗く樣にすると矢つ張り左樣だつた。

『豐岡ぢやないかッ。』

彼は吃驚して首を上げた。

『やア、君かア、之れは珍らしい、やア』と、思はず二人は握手して了つた。かの私の處女作にして傑作たる『大學出の兵隊さん』の主なるモデルは實に此の豐岡君であつたのだ。

『親父になつたなアー。』

『君も親父顏になつたなアー。』

二人は唯懷舊の眼たゝきを交はす許りであつた。そこへ『よーッ』と、英ちやんが入つて來た。續いて其の昔野球の選手であつた鍛冶君が來た。吉田、密田の二人も來た。

その裡、上官の姿が見えた。上官の言葉は叮嚀なものであつた。後備役になると、斯うも態度が優しいものかと思はれた。一人不參者があつた。何うしたんだらう。罰にならなきやいゝがと、心配して遣つた。

取敢へず聯隊長の所へ申告にぞろ〳〵と出かけて行つたが不在だつた。代理が出て來て『洵に御苦勞だが、國家の爲めだ、しつかり遣つてくれ』と云ふた。我々は『ハツ』『ハツ』と、今更の樣に古い軍隊語を發音した。それから所屬部隊を改めて命ぜられた。更に申告の必要な場所があつた。そこへ行つた時に私は上官に、『上官の命令は其のことの如何を問はず絶對に服從すべし』と、云ふ文句は今でもありますかと訊いた。あると答へた。

又その上官は一々職業を書いて出せと云ふから出した。すると私のを見て。『著述とは變つた方面ですね。どうして此麽方面へ！』と訊いた。私は謹んで『それは天才であります』と答へた。あとで皆の連中、フキ出すまいことか、流石だ、流石

だと一齊に手を叩いた。

それで其の日はもう終つた。皆は散々ばら〳〵になつた。私と英ちやんとは互に居所が近かつたので、明朝から早く出た方が誘ひ合はさうと申合せた。

その日、私は此の市で第一の繁華な町の宇都宮書店を訪づれた。店主の源平さんは我が子の出世を見るかの樣に喜び迎へた。私は玆でも矢張り十年の歳月の力を、その頭髪に見た。主人は夫人をも態々呼んで私の姿を見せた。夫人の悅びも亦人一倍であつた。林藤支配人も出て來た。源平さんは自ら若主人を私に紹介したりした。

何故、宇都宮書店では全部擧げて私を歡こんで呉れたかと云ふと、私はまだ學生時代に殆んど此の書店へ日參せぬ日とて一日もなかつた。それ程私は讀書に熱心であつた。早くも其れを見てとつた主人と林藤支配人の二人は特に私の爲めに、何人も入れない奥に積まれたうづ高き藏書を勝手に讀む可く許してくれた。それも亦私をして筆を以て世に立たしむるに與かつて力があつた。だから私にとつては宇都宮家の人々と

林藤さんは、今日あらしめた隱れたる恩人であつた。私は其の知遇に反かず、遂に今日を築き上げたのである。それが源平さんとしては又なき嬉しいことであつた。私も亦今日となつた姿を見せたかつたし、その時の愛顧に心からの感謝を捧げに來たのであつた。

全國の私の讀君よ。此の宇都宮書店は金澤市の一書店でなく、日本一の大書店であることを御記憶あらむことを。このことは私が云ふよりも本屋仲間では皆悉知してゐることである。東京の何處を探しても、大阪、京都の何處を歩いても、此の宇都宮書店ほどの大きな書店はないのであります。私は幸福なことには此の書店が新たに宏壯な三階建の鐵筋コンクリートの大建築を落成した其の祝賀の日に折もよく顔を出したのであつた。それを見た私の喜び、それを見せた源平さんの悅び。

源平さんは後で絹紙を宿へ屆けますから何か書いてくれと云ふた。後で宿へ歸つたら果して屆いてゐた。絹紙の外に見事な九谷燒を贈物としてあつた。私は共れに「福

の神けふも出て來い明日も來い』と書いた。それを後日石黑君に話したら、それよりか何故あれを書かなかつたんだい、あの方がどんなに面白いかも知れないと云ふた、あれとは私の卽興の歌で

樂しみは櫻の花に梅もどき
夫婦仲よく片町散步。

と、云ふんであつた。それを石黑君に試みに口吟んで見せた所、彼はカラ〳〵と大笑して、

『ウム、そいつあいゝ。傑作だ、うツはゝ』と、其の時、案を打つた。それを石黑君は思ひ出したんであつた。

『あの歌には片町と云ふ宇都宮書店の所在地があつて、猶更面白味があるんだ。どんなに喜ばれるかも知れぬから書き直せ』と云ふて、奥の方から色紙を出して來て、これに同じいのを二枚書け、一枚は己れが貰つておくと石黑君は云ふた。

私は其の一枚を改めて又宇都宮書店主宛て送つた。私は屹度思はず微笑して下さつたことゝ想像した。そして靜かに其の健康と繁榮を心に祈る所があつた。

金澤にも流石に十年の年月はあつた。私は此の市の道頓堀とも云ふ可き香林坊と云ふ場所をブラ〳〵歩いた時、驚いて了つた。昔は本當に賑かであるとは云へ、どこか寂びれた所があつたけど、今では全く垢ぬけをして都らしくなつたのに眼をみはらざるを得なかつた。

片町を見下ろした電氣の明るさ。道頓堀に見る樣な大きなくらやと云ふすしや、英ちやんの家の隣のカフエーブラジルの中の美しさ、何處へ出しても恥かしからぬものであつた。私は故郷を文化に浸すことの善惡は別として其の變遷を見ることは何となく面白いことであつた。少くも私の好奇心を滿たして呉れたことだけでも、歸鄉して來た甲斐のあつた樣な氣がした。

橋も木が鐵と變はり、宮市と云ふ昔小さな雜貨店が見上ぐる許りのデパートメントストアになつて、いつしか金澤の三越を氣取つてゐる圖が可笑しくも、愉快でもあつた。

馬に最敬禮

翌日、英ちやんと電話で打合せして、途中でピタリと出會し、二人は擧手の禮を交はす所作宜しくあつて、いざ行かうと廣阪通りを肩を並べて歩いて行つた。二人は將校だからと、悠然と構へて一歩は一歩威嚴そのものゝ樣な顏して、然り而うしてと、髭を捻り上げて行つた。

すると、後から、カツ、カツと馬の蹄の音がする。已れはフイと振り返つて見た。それは競馬に出る馬だと見えて、大事相に幔幕みたいな着物をきせ、馬丁が旗を持つてひいて來るのであつた。英ちやんは振り向かなかつた。そこで已れに訊いた。

『誰だい？』

『大佐らしい。聯隊長だぞ、屹度。』

『どうもあのカツ、カツと歩く馬の足音は聯隊長らしいと思ふた。こりや不可ない、先きへ遣り過して了はうか。』

『ウム、それがいゝ。ぢやア、己れがピタリと足を止めたら、直ぐ君も敬禮せい。いいか。』

『よし、解つた。』

『オイ、ボタンが外れてゐるぞ。早くかけろ、でないと後備將校は不しだらで不可んと、きめ付けられるぞ。』

英ちやんは驚いてボタンをかけた。足音は次第に近づいた。愈々横に聞えた。それツと許りに己れはピタリと立止まつた。すると英ちやんは今まで大口あけてゐたのをピタリと一文字に緊張させ、いきなり總ゆる敬意の眼つきをして、最上等の擧手の禮

敬意の眼つきをして最上等の擧手の禮を向ふ見ずに横の足音に捧げた、さて英ちやんめ よく〳〵見ると

を向ふ見ずに、横の足音へ捧げた。さて英ちやんめ、よく〳〵見れば馬上に人が乘つてゐる所か、田舍馬がヨチ〳〵と歩いて來たので、驚くまいことか、怒るまいことか。おのれツと己れを追ツかけた。己れは又息の續かん限り『ロ、一文字ツ』と、叫んで逃げ出した。そしてキユウ〳〵腹を壓へた。英ちやんもプツと吹き出しながら、

『こいつめが、こいつめがツ』と、拳骨に息を吹ツかけて、

『君は實にヒドいことをする。あの馬丁がキリ〳〵舞ひして轉がつてゐた。いかに本官の不德とは云へ。』

『こんな面白いことはない。だから軍隊生活は愉快だと云ふのだ。』

それを、後で一同に報告すると、英ちやんはアレー人殺しツと悲鳴を上げた。

所が此の英ちやん、怪しからんことには、自分が如何にも悔しかつたと見え、家へ歸つて家族使用人の一同に報告するに、まるで英ちやんのしたことを、僕のしたことの樣に吹聽して、『笑つてやつてくれ、笑つてやつてくれ』と、云ふたものだ。それと

は知らずに其の夜、英ちやんの所へ行くと、みんな申合せた樣にクスリ〳〵とやるので妙だナと思ふてゐると、僕が馬に敬禮したのが可怪しい。矢つ張り大學出の兵隊らしいと云ふ。

おのれ英ちやんッ。

豫行演習

これは我々より二ケ月前に召集された後備將校の話だが、AとBと云ふ二人がゐた。一日二人で相談して、こんない〻天氣に隊にゐては身體の健康上宜しくないから、英氣を養ふために散歩に行かうぢやないかと話合ひ、議は忽ち一決した。所が生憎その部室から外へ出るには何うしても上官の部室の前を横切らなくてはならなかつた。それでは見つかる憂ありと云ふので、一人が劍も下げずに、恰も便所へ行く樣な顏をして庭へ出て、それからそッと窓際へ來、コツ〳〵と硝子をノックする。それを合圖に劍を出せ、マントを出せと契約して、一人はそッと表へ出た。そして型の如く履行した。中にゐた後備君は相手の分も自分の分も『そらい〻か』『そら受けたか』と、一生懸命の最中を突然上官に見付かつた。

『オイ君等は其處に何をしてゐるんだ?』

外にゐた後備君思はずペンと反りかへり『ハイ、火事の豫行演習であります!!』

山に浸たる心

その昔、金澤の古寺町と云ふ所に窪田と云ふ家があつた。私はよく遊びに行つた。そこにとつこちやんと云ふ可愛い〻八ツばかりの子がゐた。それはあどけない無邪氣な孃ちやんであつた。この子の特長は其の眼にあつた。いかにも美しい、いかにも大

きな、いかにも亦清らかに、うるみを持つた稀れに見るものであつた。其の子の全生命は全く其の眼にあつた。若い時から子供の好きな私は、殆んど我が子か妹の様に愛してゐた。とつこちやんは矢つ張り人一倍私をなつかしみ、私が早く歸る様な様子でも見せると、ワイ〳〵泣いたものであつた。それ程私に馴染んでゐた。本當の名は俊子と云ふのだけど、とつこちやんと云ふ所に、一倍のあどけなさと可愛さがあつたので、とつこちやん、とつこちやんと持て囃されてゐた。

爾來十年。私には矢つ張り八歳の頃のとつこちやんの顏と、眼のみしか記憶になかつた。偶々今回の歸省は、再び其の家を訪ぬる可き機會を與へてくれた。行つて見て私はアツと云ふて驚いた。私は夫人から『これがとつこです』と云はれて、眼をパツチリ見開いた儘だつた。そこには妙齡の花も恥らふ美しき令孃姿が立つてゐるではないか。

聽く所に依ると、最早妙齡、その上、群を抜いだ美人ときてゐるので、緣談雨と降

つて、應接に困つて了ふと云ふことだつた。所が此のとつこちやんはお嫁さんのおの字を聽くことも大嫌ひだと云ふ。では何が好きだと云ふたら、ボン〳〵打ちこめ、虛をつけの庭球が大好きで、朝から鉢卷姿で駈けずり廻り、天つ晴れ北國第一の女流名選手だと云ふ。この名選手、先達不幸にして、最後まで敵を追ひつめ、今一球と云ふ所で、無殘や敗け軍となり、悄々引き上げたが、そこは女の悲しさ陣地へ入るや否や、友の手を取つてワツと泣き、『すツ、すツ、すみませんでした。ごめんなさい。ごツごめんなさい』と、罪を一人で背負ふと云ふ可憐らしさ。これを英ちやんが眞似して、『落つる涙で、しイく、しく。』

その勇敢な姿を見て、『よか、よか』と、云ふて青春の者共、大に思ひの有ツたけを書いて送る相だが、君に忠、親に孝の道を忘れぬ、とつこちやんは見向きもせず、一々お母様お父様に捧げ奉るので、これを見た兩親は、今更ながら娘の志操斯うまで堅實立派だとは知らなかつた。あゝ有難の教育やと、御賞美に洋服ござれ、靴ござれと、

妙齡になつた許りで、すつかり有卦に入つてゐると云ふ。

此のとつこちやん親子三人と、英ちやんに私の四人は、一日向山の奥にある大池まで遊びに行かうと相談を定めた。向山とは金澤市の向ひに見える山だから向山と云ふたんだらうと思はれる程、市に隣接して、うねつてゐる山である。春も夏も秋も冬も遊散地としては市民にはなくてはならぬ山だつた。そのズツと上に當つて大きな池があつた。私は以前その邊りへ行つた時の秋色が忘れかねてゐた。落葉うづ高くなつた小みちをザツクザクと踏みしめて行く上から、ハラ〳〵と音なく上から降る樣に灑がれた詩趣が十年後にも思ひ出されるのであつた。だから其處へ遊びに行くことを第一に主唱したのは此の私であつた。

それはまア何と云ふ美しくも晴れた空であつたらう。空には眞に浮き雲一つ見出せなかつた。その日英ちやんは善良なる親と云ふことを證據立てゝ爲めに愛兒二名を遇してゐた。二名は其の慈悲深さにピヨン〳〵兎の樣に刎ね、喜んでゐた。彼は洒脫を

ウンと用意して來た。とつこちやん親娘もそれ〴〵怠らなかつた。宿屋住ひの悲しさ私は途中で酒罎を新に購ふより外に業がなかつた。

兎ある坂道にかゝつた時に、私は『おやツ』と、叫んで行手を見た。そこには眞赤になつたからつりと云ふ凍傷に効くと云はれてゐる赤い實が、樹の半ばから、提灯の樣に、幾つも幾つもブラさがつてゐた。その形はまるで小さい卵を今少しく細長くした樣なものだつた。よく私はW坂と云ふ私の住んでゐた家近くの坂へそれをもぎに行つた記憶がある。いばらに刺されたり、手足を傷だらけにして、それでも必ず收穫を見て得々として歸宅したものだつた。此のからつり程秋を深く思はせる色はなかつた。青い空に赤い色。私は堪らなくなつた。

『オイ英ちやん、とらうか。』

『よしツ、それツ。』

私は子供の樣に走つた。そして來て見ると足元は崖であつた。

『オイ英ちやん、危險なるかな。』
『そうか、それでは僕が助けてやる。それ。』
二人は互に相援けながら、漸つとつるに手が届いた。グイと引張つた。ポンと音させて中途で切れた。又引張る。斯くすること三四回、からつりは一個だけ樹に止まる丈けであつた。それをも取らうとすると、とつこちやんのお父様は『一つ位は殘して置いた方が』と云ふた。それは秋の面白き風情を無殘にも荒々しく踏みにぢつて了ふのを見てゐるに偲びなかつたのだ。せめて一つ丈けでも左樣しておいて心ある者に見せて、秋を想はせたかつたのだ。私は何となく此處の秋をブツ壞はした樣な氣がして默つて手にしたからつりの色を今更の樣に見入つた。さうとは知らずに英後備將校殿は、英姿颯爽として、
『オイ、それも取れツ』と、下で怒鳴つた。
『ヤイ、無風流めツ』と、叱り付けると、俄かに悟りを開いて、『如何にも左樣だ。ウ

ン殘しておけツ』と、急に風懷の士を裝ふた。彼も亦詩を愛するの人であつた。
それ等のからつりで、首飾りを拵へて、まるで南洋の土人の樣に互に手足面白く躍つて見せた。酒なくして既に秋に醉ふた所、我等は矢つ張り自然の子等であつた。
坂を下つて田園、その畔道を傳ふ樣にして行くと、俄かに夫人が『アレーツ』と、消魂ましい聲を出した。泥田の中へ足でも落したのかと先きに歩いてゐた連中、びつくりして振返つた。え？　え？　え？　眼は均しく彼女を見た。
『あれを御覽。あれを。』
見ると、白い鳥が何百と群をなして、蒼天から川面目がけて舞ひ落つるのであつた。
『あの樣、あの美しさ』一同は暫らく立止まつて注視した。何鳥であるかそれは解らなかつたが、陽の光りを羽根一ぱいに受けて、銀の色なして飛び舞ふ樣は、人々たゞアレヨ、アレヨと許り。
英ちやんは望遠鏡があるぞと威張つて、子供の肩から外して、順々に『よく見える

ぞよ』と手渡した。『成程、成程』と、今更の様に偉大なる發明品の前に首を下げた。

其處らはもう淺野川と云ふ川べり近くであつた。市より遙かに上流に位してゐた。

街は遠くに見え、水は音立てゝ流れた。花に似た赤い木の葉が白い薄と亂れ合つて、秋の色彩を競ふてゐた。橋を渡つて行くこと暫し、あるかなしのお寺の横に折れて愈愈山道にかゝつた。道二ツ。どつちへ行けばいゝやらと迷ふた所に茅屋があつた。英ちやんは『吾人何れの道をか選ぶべき』と、訊に入つた所、ノコ〳〵出て來た時は、小さい鼻たらし、何を訊いてもムニヤ、ムニヤ。英ちやんは可成頭を撫でゝおべんちやらをしたんだけど、遂に無爲に終つたので、思はず睨みつけて『アレー鼻たらしッ』と、到頭悲鳴を上げて了つた。

大は小を兼ねるからと云ふ論法で大きな道を選んで行く。ヨツくりお墓の前へ出た。そこに二人の人影があつた。一人は薪に腰を下ろしてゐた。見ると最早餘命幾許もないと云ふ老婆。道を訊ねてから、その婆さんに幾歳か？　と訊いたら七十六だと

答へた。私は此の年齢まで働かざるを得ないのかと、心思はず霎された。二年前、私は富士の五湖廻りを企てたことがある。その時に精進湖を見下ろしながら本栖村に出て馬に乘つたことがある。その刹那私はヨボ〳〵とした老婆が、今にも腰の骨を折るかと思はれる樣に山なす草を擔いで來たのを見て、ホロリとさせられた。それと同じい氣持ちを私に抱かせられた。『どうか身體をお大事になさい』見知らぬ老婆であつたけど、私は心からさういたわる言葉を繰返した。老婆は今更の樣に自分の姿と年齢を意識して、『有難うございます、有難うございます』と眼をしば叩くのであつた。

教へられた道は又迷はされた。行つては人に逢ひ、人に逢つては戻り、遂に最後に大池に來た。お互は漸つと明るい笑顏を其の時交はすことが出來た。全く途方に暮れては幾度も立止まらされた丈けに、池に出た時の喜びも大きかつた。

池は山に包まれた樣になつてゐた。その山も斜めに、松がぬつく〳〵と生えてゐた。黃色い芝や松葉が天然の座敷を造へて、そこ此處に待つてゐた。一同は一番いゝ御座

敷を選んで其處に腰を下ろした。忽ち酒盛は始まつた。ハム、コンビーフは洒落たところ、かい乾、蓮根など〻魚菜之に加はり、『先づ一杯』『茲へも一杯』と、時ならぬ枯木の山の賑はひ。

間もなく、私と、とつこちやんのお父様は、い〻氣持ちになつて松の根を枕にグーツと一眠り。醒めて僕一句あつた。

松の木の、根もと枕に紅葉かな。

どうだい。何とか云ふてくれ。

外の者達は鬼ごつこの最中、英ちやんが面白可笑しう子供を遊ばせてゐるのだ。あ

あ我れ善良なる父を見るかな。

再び山ゆけ、そら谷をゆけ。一同立上つて又歩く。日は愈々輝き、氣は益々澄んだ。

一同は唯譯もなくさんざめた。

突然、『アレーッ』と、絹の裂く樣な女の聲が後にした。そのアレーッは何時もの面

白半分のアレーではなかつた。眞に叫ぶのアレーであつた。一同サツと色を變へて聲のした後を振返つた。すると女と云ふのは窪田夫人であつた。窪田夫人は今しコロコロ〳〵と、昆布卷の樣に轉がつてゐるのだ。それが止まらうにも止まらないのだ。氣の毒よりも可笑しいので、一同ドツときた。然し夫人の身に取つては笑ひどころではなかつた。茲が命の捨て所でもあるまいと懸命に踏み止まりに努めたが、如何にせん又辷り又轉んだ。茲に於てか夫人に最も近くにあつた我がとつこ孃は親に孝行は此の時ぞ。洋服御賞美今なるぞと、飛んで行かうと身を構へた時に、そんなに御賞美とられて堪るものかはと、夫人はどつこいしよと起き上つた。とつこちやん遂に長蛇を逸した。

『何うしたんです?』

『何うしたんです?』と、見舞の聲八方におこつた。

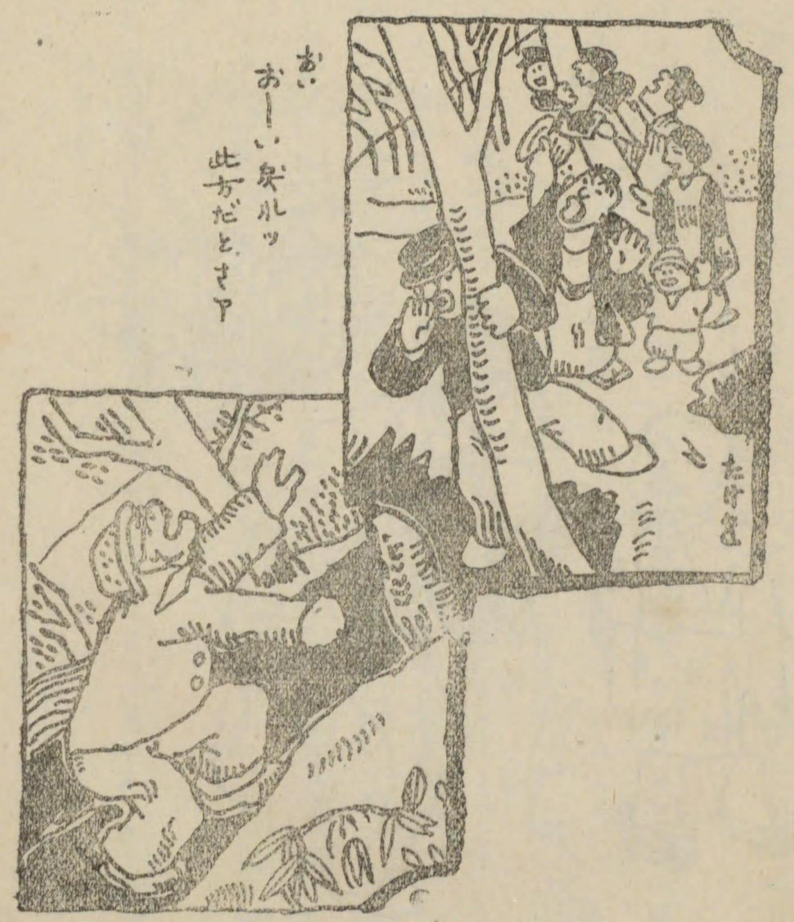
『此處へ來て斯う下り樣とした所が、スルリツと宙返つたでせう。あら恥かしやと無

理に出る聲を壓へて起き上がらうとした拍子に又コロリでせう。さうなつては外聞よりも着物が大事です。』

命と云はずに着物と卽意巧妙に遣つて退けた所が大喝采。今更になつて、一同口々に『私が助けに走りかけたんだつた』と、親切顏に云ふこと、云ふこと。

偖その次に控へしは已れの番だ。私は又もや道二ツになつた所へ來た時に、『此方の道に違ひない』と頑强つて、一散に谷を駈け下りた。遙かに下りて了ふと上にあつた面々『おーい戻れッ、此方だとさア』と、大聲あげた。見ると其處には一人の見知らぬ男が立つてゐた。大方それに訊いたのに違ひない。あゝ弘法も筆の過りとはいゝみぢくも云ふたりと後悔して、さて戻らうとしたが、急坂とて、その歩みの鈍いッたら。息は切れる、汗は額ににじむ。之を見て一同手を叩いて『わアーい。剛情思ひ知つたか、わアーい。』

偖又その次に控へしは英ちやんでござる。英ちやんはとつこちやんのお父様が平生



餘り出歩いたことがないので、早くもヘタ張つて了つた。それを助くるに道あり、水を飲ますに限ると思ふた。そこで迷子を探す樣に『山のお水は何處やーい』と、血眼になつた。所が程經て一軒の別莊の前へヒョツクリきた。これぞ神佛の加護なれと、喜び勇んで奥へ入つた。そして慇懃叮重に水を所望した。所が水はツイ其の下にありますと、崖をさした。有難う御座いますの百萬遍を云ふて、所謂其の下なる所へ下りて行つて見たが、いくら探しても見附からなかつた。そこで大に脹れ面して、猿の如く輕快に笹につかまつて上がらうとしたが、疲れ切つてゐたことゝて、其れが協はなかつた。それを又無理に協はさうとした所、笹でサツと手を切つた。國家の干城も茲に於てか『オーイ助けてー』ときた。

そんなエピソードの色々を殘して、次第に我々は人の足繁き場所に出た。俗臭迫るの感が今更の如く過ぎ來し彼方を見返らさすのであつた。唯一つ、それは街に向つた谷間からぬツくと伸びてゐる大樹に、繪で見る樣なつた紅葉が全で鱗の樣になつて、

赤くかざしてゐる見事さが、下り阪の一行に最後の秋を偲ばせて臭れるものがあつた。それは一本二本、三本あつた。とりわけ最初に見たのが深い強い印象ものであつた。我れ又句ありと出た。

彼處にも、おや此處にもとつた紅葉。

掛茶屋に來て茶を飲んだ。柿を喰べた。いつ再び來るか測り知ることの出來ない此の山への無限の執着!! 私の腰は容易に立たなかつた。

歡喜の宴

私は各方面から招待を受けて、殆んど滿足に夕食か宿で濟ますことが無かつた位であつた。金澤の料理店には大きなのが可成あつたが、何と云ふても印象の深いのは鍔甚であつた。

鍔甚と云ふのは、市の高臺に位置してゐた。私は最初そこへ呼ばれたのは北國新聞社長の林君からであつた。青年時代にそこは迎も我々の足ふみを許されぬ位、高等なものであつた丈けに、その招待は殊に私には嬉しく思はれてならなかつた。

鍔甚の障子をガラリと明けると、百萬石の街は一望に收まつた。美しい犀川の水が藍染めの布でも敷いた樣に、所々白い模樣を見せて流れてゐた。遠くには醫王、戸室の山が、いつも變らぬ壯嚴さを見せてゐた。私にはその以前、嶮峻を誇る醫王山の絶壁からもうスンでのことで谷底に落つる危險のあつたことが思ひ出された。雨に濡れた岩の一角を辷つて、ザヾツと辷り落ちた時、もう駄目だと、云ひ樣のない悲痛な聲を出して、友の名を呼んだものだつた。安達と細野の二人に逢ふと、今でも其の話が出て、『あの時の顏つたら、まるで目白に喰べさす青菜みたいだつた』と、冷評かしたりする。確か膝から足首まで血ににじんで紫色に脹れ上がり、又手の指は助かりたいと云ふ一心で所きらわず巖に獅嚙みついた爲めに、爪をはがして見るも無殘な體たらくで

あつた。

犀川ではよく又ごりと云ふ此の地獨特の川魚が石の下に身を隱してゐる奴を硝子箱から覗き込んで、ヤスを片手にヤツと頭を突き刺しては、悦に入つたものであつた。そして家へ持つて歸つては燒いたり、汁にしたりした。それが幼なき强者としての振舞ひであつた。弟と二人で、欄干のない橋に腹這ひして下を覗き込んで、今少しで眞逆樣と云ふ危ない目にあつたことも、私の記憶から失せてゐない。色んな追憶が私をして感慨に浸らしめた。

鍔甚の料理は實にうまいものであつた。英君や澤野縣會議員や、松岡縣技師などが私の歡迎會を是非すると云ふた時に、私は特に林君に依つて知つた鍔甚を會場にと願つたのであつた。それ程鍔甚は私に深い好印象を與へてくれたのであつた。

最初林君の時、來た藝者の中にシヤツボと云ふのがゐた。私は金澤に此麼品のいゝ藝者がゐるのかと驚かされて了つた。聲も亦女性らしい銀鈴の美しさを持つてゐた。

二度目の會の時も矢張り此の藝者がきた。君子の樣に謹嚴な松岡君も、之を見ては君子になつて濟ましてゐることが損であると自覺したかの樣に、『シヤツボや、シヤツボや』と、下にも措かぬ音色を出して『あゝ今日ほど酒のうまい日はない』と、僞はらざる心の叫びを張り上げて喜んだりした。シヤツボには天狗と云ふ屋號の牛肉屋主の子供を出產したと云ふ行儀の惡い事があるんだと云ふ。そればかりでなく今では封鎖とやら云ふて其の天狗樣以外はきつう男禁制になつてゐるんだと云ふ。私も知らない裡は松岡君以上の猫撫聲で『シヤツボやシヤツボや』と、云ふたけど、子供と封鎖を聽いてからは俄かに眼を白黑させて、アレーと仰天し、遠くて近きは男女の仲だからと、急に孔子の樣な顏をして遠かつたから宜かつたものゝ、然し我れとて友情大に篤い。松岡君は根が溫厚な男だけに若しや其の心に飛んだ中年の戀とやらが釀しては君國の一大事と許り、そつと彼女は天狗面で御座いと大に說明すると、松岡君急になめくじを嚙んだ樣な顏をして『踏み破る千山萬岳の月』と、俄かに勇壯活潑になつて、

再びシヤツボの顔を見なかつた。シヤツボはハテ可怪しいと私を見たから、私は默つて拳を二ツ作へて、鼻の頭から連結させて見せた。シヤツボ之には閉口嶺首して、『握手するから默つてゐて頂戴ね』と、張作霖の如く只管和平を望んで止まなかつた。

その日私は逢ひたい〳〵と思ふてゐる連中に皆逢つて嬉しかつた。昔、野球で鎬を削つて爭ふた安藤、鍛冶の兩君や、柔道の藤田君や、誠實な浦上君、それ等の人と相見たことは其の日の宴會をどんなに華かに明るくせしめたことか、私は非常な恐悦顏をして天井に煙草の煙をたなびかせてゐると英君は『それ見ろッ、どうぢや』と、脊中を叩いた。歡迎宴は斷じておことわりと飽く迄固辭してゐたのを無理に引張り出した英ちやんは得意滿面で左樣云ふたのであつた。

石黑君は石黑君で、私が若しや答禮の辭を述べるに際し、どんなに肩そびへさして威張つたことを云ふだらうかと、ハラ〳〵して見てゐた所、己れを芝生よりも低く卑下して愼しみ深く、感謝のおの〳〵を見せて遣つてのけたのが、奥床しくてよかつた。

あゝ神妙に出た所に、生椎茸の樣な、實にうまみが含まれてよかつた。今後どこの席へ出てもあの呼吸を忘れるなと云ひながら、さア飲めと杯をさしたりして呉れた。お互は面罵を叩き付ける樣にしながらも、どこか其處に溫かい血の流れの通ひを覺えるのであつた。澤野君などは私の歡迎會を早くやらんか遣らんかと毎日の樣に英君に追窮したと云ふ。そんなことを聽くと、溫かい友人達の眞心が、私の胸の中にシミにぢんで來る。

何故私は歡迎會を好まないかと云ふと、中には勢ひ義理で出て來る人もあるのでそんな人は內心迷惑を感じてゐるに違ひないと自分の經驗上それが察せられたので、若し左樣としたら氣の毒だからと云ふ意味で斷はつたのだ。だから私は英ちやんに先方から喜び勇んで來る樣な人でなくては厭だと云ふた。且つ私は各方面に友人を持つてゐるから、同じ友人でも、君等から見て其の空氣と添はぬと思ふものは一緒に仲間にしてくれるな。それ等はそれ等として私の爲めに計るだらうからと賴んだ。英ちや

んは其の呼吸を全く呑み込んでゐた。私は近頃にない愉快な日であつたことを茲に特記したい。何んでも其の時來た連中は申合せた樣に私を見て、

『あゝ云ふ快活な天空を馬で行く樣な奔放な氣持ちに一日でもなつて見たい』と、云ふてゐた相だ。以つて如何に私がハチ切れ相な恐悅にあつたかと云ふことが解るではないか。

わが友等の上に榮あれ。シヤツポあれ。

唇、悲しき日

私の青年時代、或る町に素敵な美人がゐた。その顏を見たさに私は隨分惱ましい日を送つたものであつた。私は其の家に出入してゐた時、あゝ貰うなら此麼美人をと思はぬ日とてなかつた。然し其の家は當時餘り良過ぎてゐたので、愁じそんなことを云

ひ出した爲めに、偖は娘を見に來るのが目的だつたのかと家人に思はれ、それが爲めに折角の交際を差止められては鍛蛇だと私は强ひて何事も云ひ出しはしなかつた。實際我々の樣な青年は見向きにも價せぬ程、その家は格式あつたものだつたし、第一年齡に於ても其麼に距りもなかつたのだつたから、よしんば云ひ出した所で、どうせ問題になるものではなかつた。然し其の白い顏は如何ばかり若き頃の私に物想はせたか。東京へ去つて來る時、私は彼女は一生嫁がないと云ふことを人傳に聽いた。何でも親の熾烈なる愛撫の犧牲になつて、自分の好める道に生涯を托することに決心したと云ふことであつた。浮いた話一つない溫和しいお孃さんであつた丈けに、それに其の頃の模範娘と謳はれてゐた丈けに、多くの人は唯感心なと評するのみであつた。可哀想にとか、氣の毒だとか云ふ言葉は其の家庭の慈しみをよく知らぬ人の言葉であつた。

さう聽いては最早何うすることも私には出來なかつた。私は東へ上る希望の中に、その戀協はぬ物淋しさを抱いて、遂に故郷を後にしたのであつた。

今度の十年振りの歸郷は流石に想ひを其の佳人の上に走らすことを忘れなかつた。私は以前の彼女の宅へと訪れて行つた。するといつしか門札は打つて變つてゐた。驚いて中の人に訊くと、向ひの家の二階にゐらつしやいますと云ふた。これは又意外なことをと、その足で行つて、中原さんは？　と尋ねてゐる所へ、見るからに頭を白髪した然し昔の面影を其の儘のこしてゐる小母さんがヒョツクリ出て來た。

『やア、小母さん』と、私は聲かけた。小母さんは不思議相に私を見守つた。どうしても解せぬ風情を示したので、私は私の名を名乘つて聽かせた。すると小母さんは『まアー』と、驚喜して私を見上げ見下ろして、

『まア、よくお訪ね下さいました。まアー』と、その聲はシドロモドロと歡喜に打ち震えてゐた。それからの話に依ると、何んでも父が死んで了つたので、それから急に濱子さんが二十八に嫁入りして了つたと云ふ。所が不運にも上海にゐた時、永らく風邪を引いてゐたのが素になつて、遂に肺病になり、その肺病で逗子に轉宅し、昨年は

黄疸を併發して今しも死にかゝつたこと、それで自分が永らく看護について行つてゐたこと、今は東京の澁谷に靜かに養生を續けてゐます。もう痩せに痩せ衰へて昔の面影もなく、我娘ながら何うして斯うなつたのやら氣の毒で見て居られませんと、眼に涙して私に話をした。

『實は今であるから打ち明けますが、あの人を私は貰ひたくて仕樣がなかつたんです。ですけど、自分と云ふ其の頃の身分を考へて云ひ出しませんでした』と、始めて多年祕められてゐたものを其處で明かすと、

『それなら其れと仰しやつて下されば宜かつたに。然しもう何も緣ですから』と、今更それは懷舊の言葉として聞き流すより外に道がなかつた。

『始終貴方の噂をしてゐますよ。あの頃から他人と變つた性格を持つた方で、ある時は雨の日の夕暮れ私の傘の中へ走り寄つて來て、少し入れて下さいと賴まれて、生れて始めて他の男の方と五六間歩きましたなどゝ、話して居ましたよ。あの娘も病氣な

ものですから様々が思ひ出されるんでせうね。まアよく昔と變らぬお心持ちでお訪ね下さいました。もう私共のことなどは疾くに忘れてゐらつしやるものと思ふてゐましたに、人と云ふものは薄情なもので、自分がよくなつたり相手が悪くなつたりすると身向きもしないものだけど、よくまアー』と、老い行く身には少しの親切でも、直ぐ嬉し涙であつた。

その夜、この母人と妙齢の令孃が一緒に私を訪ねて來た。その令孃は濱子さんの昔そつくりであつた。たゞ丸々と肉づきよくなつてゐた丈けが變つてゐた。私にはその顏には記憶がなかつたが、小さい七ツ八ツの子であつたこと丈けが朧ろゆながら浮んで來た。濱子さんの次の娘は？　と訊くと、もう人妻だと云ふ。今姙娠の身で二月には出産すると云ふことだつた。あの娘も、もうそんなですかと私は歳月の餘りの早さに唯々驚くより外はなかつた。それは愛嬌たつぷりな人なつこい娘であつた。どんな所へと試みに訊くと、意外や傳太郎君だつた。傳太郎君とは海軍の大尉で、私より二

期ほど中學は遲いがよく顏を知つてゐた。活潑な頭腦のいゝ軍人に持つて來いの男だつた。三年程の執心で、到頭戀の凱歌をあげたと云ふことであつた。今その次女が出産の爲め此方へ來てゐると云ふので、何故一緒に來なかつたんです？　と訊いたら『恥かしんですつて！』と母親は微笑んで見せた。

『もう此の娘もそろ〳〵お嫁さんですね？』と云ふと、

『何卒いゝ所があつたら宜しく。年頃になると親は其れ許りが苦勞です』と、小母様はまだ重荷を此の世で下ろされなかつた。

末女はツイ先達まで東京の濱子さんの家にゐたと云ふ。その家の所在を訊くと私の所から譯がなかつた。

歸京してから私は早速見舞旁々彼女を訪ねて行つて見た。どんなに彼女は驚喜したか。娘の頃は自分の身を愼しむ上から、殆んど私と碌に言葉らしい言葉も交はさなかつた彼女も今日始めて様々と物語るのであつた。私は其の疲れ切つた生の顏や、痛せ

衰へた其の五體を眼のあたりにして、無量の感慨に打たれて語る言葉も途切れ勝ちであつた。唯私として其の際本當に相濟まなく思ふたのは、樣々の心づくしを一つも口にしなかつたことであつた。珈琲だに私は唇を避けたのであつた。

私は左樣したことが孰麼に彼女の心に痛ましい響きを與へることかと悲しく思ふたりした。彼女としては假令自分の病氣が傳染病であるとは云へ、之れ程の警戒を、昔我れをなつかしめる人の上に與へねばならない運命を物淋しく、思ふたに違ひなかつた。そして今更の樣に宿命のはかなきに涙したであらう。

彼女にはせめて良人なる人の最善の愛が唯一の力であつた。その良人は傷ましき彼女の病氣の上に、どんなに慰めを盡して呉れてゐるか、彼女は羞かみながらも嬉しげに其れを語つた。毎日勤めから一分も遲れずに、家路に急いで來ては優しい言葉と、病を征服する强き言葉を怠らないと云ふことであつた。

私は更らに良人たる人が、全愛を捧げて此の傷める花瓣の上に、多くの力を與へら

れむことを翼つた。そして再び生あるものゝ幸福と歡喜とに彼女の魂あらしめんことを靜かに祈つた。

お時さん

或日、意外にも女の聲で電話がかゝつて來た。『どなたです？』と訊くと、

『他見男さんですか』と、念を押して、

『妾、お時ですよ』と、云ふ。たゞお時だけでは解らない。

『え？』と訊き返すと、

『平里のお時ですよ、これでも解りませんか』と云ふ。平里のお時さんなら解つた。

その以前、私と細野と小原の三人は英氣を養ふ爲めに態々北廓の或る家を目掛けて突喊した。或る家と云ふのは其の平里である。よもや我々みたいな其の頃の衣は肝に

至り袖腕に至る者共の名は疾くに忘れてゐると思ふてゐたのに。ハテこれは又藝者に似合はざる神妙かな。

『やアお時さんですか。』

『今、漸つと覺えが出たんですか、だから男と云ふものは皆薄情と云ふんですよ』と、エラい所で一本御面と打つて來た。

『どうして又私が此處にゐると云ふことが解つたんです?』と訊くと、

『そりや平里のお時とも云ふ可きものが、それを知らないでは商賣は出來ませんよ』と、萬丈の虹を吐いて、

『ねえ、時に是非お目にかゝりたいと思ふんですが、今から上つても差支へ御座いませんか』と云ふ。

『いゝとも、いゝとも、貴女と私は昔から公明正大な仲だから、俯仰天地に恥ぢませんからどうぞ來て下さい。來る時には差支へのある方面へ丈けは豫め了解を求めてお

かないと、飛んだぬれ着を被りますよ。』

『だ、大丈夫ですよ。では』と云つて彼女は始めて電話を切つて了つた。

其の頃の平里のお時さんと云ふたら北廓でも錦太と云ふ妓と併び稱せられる名妓であつた。愛嬌のいゝ誰れにでも人好きのする評判者であつた。それが何を思ふて斯うして態々訪ねて來ようとするんだらう。私は心待ちに待つてゐた。

そこへ彼女は女中の案内に連れて、御免なさいと云ふて入つて來た。私は其の顏を見て、すつかり驚いて了つた。餘りにいゝお女將さんになつてゐたからだ。先方でも私を見て變りましたねと云ふた。

『まア隨分立派になられたわねえ。昔の學生時代の貴方よりかズツと上がりましたよ』と、早速ながらお賞めの言葉を浴びせかける所、御商賣柄と感心して了つた。どうして私の來たことが解つた? と訊くと、近頃見たこともない新聞を先日フイと讀んだ所、それに出てゐたと云ふ。それに召集云々と附記してあつたので、ウイ二三日前あ

る將校に斯う斯うした人が入りましたかと訊いたら、さア僕は騎兵の方だからよく知らぬと云はれたので、悪いかも知れぬとは思ふたが、思ひ切つてお宿へ電話をした次第だと述べた。そして之は詰らぬものですが召上れと森八の長生殿と云ふお菓子をお土産に呉れたりなどした。

『お時さん、矢つ張り藝者をしてゐるのかい？』と、訊くと、

『まアいつまで藝者をしてゐると思ふてゐるの、もうお女將さんに昇進よ。』

『ホウ。豪いものになつたなアー。』

『冷評かしちや困るわ。藝者がおかみさんになるのは當然ぢやないの？』

『つまり榮轉だね。シテそれでは歴乎とした旦那がゐるごらうね。』

『そりやゐるわ。ゐなけりや人が女一人だと思ふて侮りますからねえ。』

『誰だい？』

『貴方の知らない人。永らくアメリカにゐた方。』

『可愛がつてくれるかい？』

『可愛がるなんて其麼事。もう十年も其の人のものになつてゐるんですよ。』

『それぢやおめかけさんかい？』

『云はゞさうなの。ねえ西川さん、私しツク〳〵いくら貧乏してもいゝから、正妻になりたくて仕様がないの。私は日蔭者の生活がもう懲り〳〵したの。』

『どうして？』

『だつて、そこにはねえ色々な複雑したことがあるんですもの。いくら可愛がつてくれたつて自分で自分を日蔭者と思ふたり、人の妾だなどゝ思ふたりすると一歩も外へ足を踏み出したくはないの。あゝ厭だ、厭だ、厭だ。つく〳〵世の中が厭になつてゐるのよ。』

『ぢや僕の妻にならんか。』

『戯談仰しやい、奥様に叱られますよ。時に細野さん何うしてゐらつしやるでせう。』

『相變らず隆々たる勢ひさ。細野は艶子さんにぞつこん惚つてゐたねえ。』

艶子と云ふのはお時さんの本當の妹で、矢つ張り藝者をしてゐたんだ。
『艶子もね、驚いちや不可ませんよ、もう五人の子持ちですよ。』
『今一體幾歳だらう？』
『二十八よ。』
『二十八で五人の子持ちかい？』
『えゝ、十五の年齢から生み續けてゐるんですもの。』
『鶏冠見たいだね。』
『本當にね。艶子も貴方に逢ひたがつてゐましたよ。だけど艶子の旦那と云ふのは、そりや嫉妬やきなの。それで一度面白いことがあつたんですよ。いつか細野さんが來て、是非艶子を一目見たいと云ふから、恰度その日は艶子の旦那の留守な日と定まつてゐたものですから、ゐらつしやい大丈夫と無理に家へ連れて行つたの。所が何うでせう、ゐない筈の旦那がチヤンと其處にゐるんぢやありませんか。私し驚いちやつて

ね。この方は妾のお知合で、今しがた其處で逢ひましたものですから、妾の妹の宅がツイ間近ですからお茶でも飲んで行きませうと無理にお連れしたんですよと濁しましたが、細野さんツたら、土塀に全で蛭の様にクツついた儘、身動きもしないんですもの。まさか艶子に細野さんが來てゐるとも知らすことも出來ず、到頭逃げて歸つて了ひましたわ。細野さんそんなことを云つてませんでしたか？』
『いゝや、恥だと思ふたんだらう。』
『別に艶子と變なことが一度もあつた仲ではなし、たゞ孰方も初戀みたいな氣持ちだつたので、見てゐても可愛いかつたわ。細野さんたら、艶子と向ひ合つてゐると、咽喉が直ぐ乾くと見えて、何度となしに水をくれ、水をくれでせう。可笑しかつたわ。屹度初戀だから身體中が熱くなつたんでせうね。燒け石に水てあのことだわ。』
『お時さん、お時さん。』
『え？』

『お時さんの旦那は嫉かないかい？』
『大丈夫。そりや妾を信用してゐるんですもの。今日もチヤンと此處へ行つて參りますと云ふて出掛けて來たんですもの。』
『その時、梅干を嚙んだ樣な顏をしなかつたかい？』
『まアそんなこと。でも內心何う思ふてゐるかそりや解らないことよ。』
『時に今日は何と思ふて私を訪ねて來たの？』
『まア失禮ね。そのお顏が見たかつたのよ。』
『有難いねえ。だから永生きするものだとさ。』
『それは左樣と、今度お出でになつたのを幸ひ妾と一緒に少し遊んで下さらない？
そして私の家へも來て下さらない？　母がね、そりや見たがつてゐるのよ。とーふと豆腐屋の賣聲の上手な人だと云ふと、今でも轉がつて笑つてゐるのよ。そして、そりや貴方が出世なすつたなどゝ聞かしたりすると、涙を流して喜んでゐるの。年寄りて

たけを

何んでもないことでも喜んだり全で子供の様ね。でも妾には僅つた一人の母だからとそりや大切にしてゐるのよ。ねえ西川さん、明日でも何處かへ行つて遊んで來ませうか。』

『二人丈けでかい？』

『二人丈けでいゝぢやないの？』

『さア、そんな事をしたら旦那は屹度いゝ顏はしないよ。いくら信用があつたつてさ。』

『ぢや子供を連れて行きませうか。子供と云つても艶子の子を私の子にしたの。もう女學校の一年生よ。それならいゝでせう？』

『女學校の一年生？　艶子さんの　が。』

『だから世の中の進み方が早いと云ふんぢやありませんか。』

お時さんは本當に立派なお女將さんになり濟ましてゐた。表には笑みをたゝへてゐたけど、何處か包み切れない淋しさが顏にあつた。何か大きな心配事でもあるのでは

なかろうか、私は左様思ふたけど、強ひて訊く様なことをしなかつた。

次の日、三人で金石と云ふ金澤から二里程離れた海岸へ行つた。私の幼なき頃からなじまれた海であつた。見るもの總て思ひ出の深いものばかりだつた。空、實によく晴れた日で、いつもなら逆巻く日本海の大海原も、その日は鎌倉で見る海の様な靜まりを見せてゐた。然し何處か日本海には太平洋の海に見ることの出來ない男性的な雄雄しい所があつた。その半日の清遊を終つて、我々は金谷館と云ふ此の市第一のレストランに來た。昔は其處へ來て玉突遊戯の揚句夢中になつて洋食をパクついたものであつた。その味のうまさは今でも忘れなかつた。

いくら東京でうまい洋食を喰つてゐてもあの時の味に遠く及ばない様に思はれたので、此の機を利用して寄つたのだつた。所が此方の口が奢つて了つたのか、田舍の洋食が拙いのか、殆んど口にすることの出來ない味であつた。私の多年憧憬してゐたものを、一瞬にして破壞された様な淋しさを感ぜざるを得なかつた。

洋食は矢つ張り東京に限ると、今度の歸郷で泌々思はせられた。

お時さんの所へは其れからちよい〳〵と私は宴會の歸りには遊びに行つた。暗い顔をして帳場に坐つてゐるお時さんは、私の顔を見ると、急に明るい笑顔を見せて迎へるんであつた。殆んど毎日の様に今日は暇だつたら來て下さいと、何故か私の行くことを頻りに望んでゐた。漸次馴れるに從つて、それとなく様子を訊くと、何んでも旦那との間に一寸面白からぬことがあつたんだと云ふ。それで其の憤を紛らしたさに私と話をしてゐたいらしかつた。私と話合つてさへ居れば不思議にも華やかな氣持ちになるとお時さんは妙がつてゐた。

よく私は友人だの知合から、そんな事を云はれる。私が顔を見せると、全で眞暗な部室にパツと電氣を點けられた様に明るくなると云ふた。まるで私は云はゞ電球でごわして。アレー。わけても石黑君に英ちやん、窪田夫人、宮保旅館主、擧つて左様云ふた。いつの間にか其等の人々を同化して自分の境地に入れて了ふ魅力は、萬人の眞

似の出來ない藝當だといつか英ちやんと石黑君が對座した時、二人で話してゐたつけ。壁に耳あり、すつかり聽いてゐたのでごわして。英ちやん英ちやん、それが人徳と云ふものでごわして、アレー。

一日、長男爵母堂から私は叮重なる晩餐に招ばれて、故郷の名物と云ふ名物のあらゆる御馳走をうけた。その上更に私の心ばかりの土産物に對する莫大なる返禮品を記念の爲に私に贈つて下さつたりした長母堂は、私には忘れてはならぬ昔の恩人であつた。その外、私は至る方面で私の爲めに盡されたる歡待に、今更の樣に故郷への執着を新たにせらるゝを覺えた。

あゝ鄕關を出でゝ十餘年。山河と共に故郷の人の心の美しかりし哉。私は此の時ほど人の心の溫かさを知つた時がなかつた。あゝ我等が故郷よ、又住める人々よ。どうか私の眞心からなる此の感謝を享けてくれ。（終）

昭和四年一月二十日印刷
昭和四年一月廿八日發行

溫泉場の女

著者　西川他見男

東京市神田區表神保町十番地
著作權所有者
發行者兼印刷者　玉井清五郎

發行所　東京神田表神保町一〇
電話神田二三三三番
振替東京三二八番
玉井清文堂

（清文堂印刷部印行）

不許複製

松原